
最後の人造人間

灰色鼠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の人造人間

【Nコード】

N3544Y

【作者名】

灰色鼠

【あらすじ】

フラスコの中の人造人間騒動後のお話

プロローグ（前書き）

初投稿です。

拙い文章ですが、それでもいいよー、という心優しい方は下にスクロール！

ブローグ

くブローグく

禍々しい光が月明かりが差す倉庫でほとばしる。

人体錬成。

それは死んだ人間を再びこの世に甦らそうとする錬金術の最大の禁忌。

人間という生き物はやるなと言われるとやりたくなるものである。

だが、この人体錬成を行った術者は人を甦らそうという意図ではなかった。

部屋一帯に書かれた術式の上に小さな影が重苦しく落ちた。

「痛っ…たいなア。ど畜生が…」

比較的子供らしい高い声が倉庫に響き渡り、むくりと起き上がった。

肩から夥しい程の鮮血が冷たい床に爛れ落ちていく。

「あの野郎オ、色々持つて行きやがって…」

突如、青い閃光が空を走った。

「さて…と、ここからどうすっかな…」

首を傾げた小さな影は、二つの紅い光を放っていた。

プロローグ（後書き）

出だしから中二病爆発ですね。

こんな感じで続けていきますので、よろしく願います！

キャラ紹介（前書き）

オリキャラと登場人物についての紹介です

キャラ紹介

…主人公…

・限りなくオリキャラです

・名前は後々出てきます

・赤髪紅目

・見た目は12歳くらい

・腰に刀、着流し、常に裸足

・真理に記憶と両腕を持って行かれました

・何故かはまだ秘密

・イーストシティに出没します

…ロイ・マスタング…

・イーストシティの東部司令部で准将やっています

…リザ・ホークアイ…

・上の准将さんの補佐をしています

…その他諸々…

多分後々出すつもりです

ざっとこんなかんじでほのぼの(?)と続けていきます!

プロローグの前書きにも書いた通り、初めての連載で右も左もわからない状態でやっていきますので、拙い文章を読んで頂ける心優しい方、想像豊かな作家様の作品をを横目に『最後の人造人間』を暖かく見守って下さいませ。

.

キャラ紹介（後書き）

ここのコメント何を書こうか戸惑います。
基本書きたいことが無いもんでして…。

次から物語が始まります！

第一話 始まりは朝（前書き）

第一話です！

短めかもしれませんが、楽しんで読んでいただいたらありがたいです。

第一話 始まりは朝

ある寒い日の朝。

青色の軍服を着た女性がある家の扉を叩く。

「お迎えに上がりました、マスタング准将。」

しばらくしてどこか気怠く扉が開き、寝癖のついた髪をばりばりと掻きむしりながら男の顔がひょっこりと覗いた。

ロイ・マスタング。

先日の軍部の内乱以降、大佐から准将に昇級した男である。

「准将、早く支度なさってください。今日も忙しいのですから。」

リザ・ホークアイ。

ロイ・マスタング准将の補佐であり、お目付け役。准将と同じく、軍部の内乱以降、中尉から大尉に昇級した女性である。

「大尉か。すまない、寝過ごした。すぐに支度するから待っていてくれ」

リザは軽く敬礼し、手を後ろに組んだ

「最近ちゃんと睡眠とられてないのでは？」

「全く、君には敵わないな。」

ロイは髪を掻き上げ、浅いため息をついた

「付き合いが長いので。司令部ではサボってばかりなのに、自宅では随分と熱心に仕事なさっているんですね。」

「ほんと、君には敵わない……」

的を射た言葉にロイはがっくりと項垂れるしかなかった。

「ま、いずれはしなければいけないことだ。イシュヴァール人の為にも、殲滅戦で傷付いた人々の為にも。」

先程、軍内の内乱と言ったがそれは表向きの話で、実際は中央に賢者の石を持つホムンクルスという人造人間、その人造人間に唆された中央軍と鋼の錬金術師、エドワード・エルリック等の国家錬金術師や北のブリッグス軍、ロイの部下達の戦いであつた。

その戦いは革命軍の辛勝に終わった。ロイはその際に元国家錬金術師のドクター・マルコーにイシュヴァール人を助けると約束したのだ。

「そうですね。でもまだ先は長いのですから無理はなさらないくださいね。」

「今日は随分と優しいんだな」

「無理をして体壊した挙げ句、休暇を取られても困りますので。」

「どつやら私の気のせいだったようだ。」

ロイは拗ねた小さい子供の様に口を尖らせた。

二人は東部司令部に着き、指令室の扉を開けた。二人が一番乗りだったようで部屋には誰もいなかった。

「全く、何をやってるんだあいつらは。給料減らしてやろうか。」

深いため息をつき、いつも通り椅子に腰を掛けようとした時だった。ロイの顔色が変わった。

「准将、どうかなされたのですか？」

リザがロイに駆け寄り、目線の先の、机の下にあるものを捉えた。

「これは……！」

そこには、全身に血を付けた小さな少年が体を縮こませて横たわっていた。

第一話 始まりは朝（後書き）

うーん。

前書きも後書きも何を書けばよいのやら……

次話はちよつと話は進むかもです。

第二話 謎の少年（前書き）

第二話目で不定期投稿だな、と自分でも感じるこの頃です。

「文章下手じゃね？」

と思う方！

思うだけにしてください。
私にもわかってますので。

第二話 謎の少年

ロイと紅い髪の少年とただならぬ雰囲気で向かい合っている。

「……何とか言ったらどうだね？」

「……」

〈数分前〉

「これは……！」

「……子供……だよな」

「……子供……ですね、かなり訳ありの」

少年はアメストリス国内では見慣れない黒の服装おしており、裸足で横たわっていた。

さらに二人を驚かしたことは、今は出血はしていないものの、上半身がべったりと血で赤く染め上げられて、少年の傍らには見た目に似合わない長い刀が置かれていた。

何故このような少年がここにいるのか、何かに追われここに逃げ込んできたのか、考える前に二人の体はすでに動いていた。

「大尉、この子をソファアーに寝かせておいてくれ」

「了解しました」

リザはロイの机の下から少年を起こさないよう、そっと抱き上げると、ソファアーに寝かせた。リザはその時、少年に対して違和感を覚えた

「これは預かっておいた方が良さそうだな」

ロイは少年の側に置いてあつた刀を持ち上げた。

「見慣れない服装だな。シンの子かもしれんな」

「だとしてもアメストリスに来る理由がありませんが」

そうこうしているうちにロイの部下が出勤してくる

「おはようございます……って誰ですか。これ」

ロイ達の次にやって来たのはホットドックをくわえ、軍服だらしく着ている男、ハイマンス・ブレダ。この男も人造人間との闘いで陰ながら活躍したのだ。

「知らん。私が知りたいくらいだ」

「まさか准将の子じゃないですね」

ブレダが准将に疑いの目を向ける。

「な……！そんな事があるわけないだろう！……多分……」

「可能性はあるんですね」

「やかましい！」

そんな喧騒の中、起きたのか起こされたのか、少年がむくりと起き上がった。

「あ、起きた」

「ようやく起きたな。私の質問に答えてもら」

少年はロイを一瞥すると話も聞かず再度ソファーに寝転び、寝はじめた。

「寝るな!!」

ロイは質問を無視された事に腹を立てた。少年は眉間にしわを寄せ、不機嫌そうに起き上がった。

すかさずリザが少年の前にお茶を出す。

「ごめんなさいね。うるさくて。良かったら飲んでね」

少年は目を丸くしてリザを見ると唇を横に引き結び、首を横に振った。

「そう。じゃあ、ここに置いておくわ」

リザはお茶をいれたカップをテーブルに置いた。

「すまない。私は子供の扱いは慣れていないのでね」

ロイはこう行った場面でもリザがいて良かったとつくづく思う。

「私は元国家錬金術師、国軍准将のロイ・マスタングだ。君の名前も教えてくれないかね？」

「……」

少年は品評するかのようにロイの全身を見る。その少年の紅い目は、ひどくくすんでいて、まるで魚の死んだ目のようだ。

黙ったままの少年が僅かに身じろぎすると、着流しの袖がするりと肩から滑り落ちた。

「な……！」

ロイは絶句した。なぜなら、少年の肩からあるはずのものが無かったのだ。切り傷もなければ、事故に遭った形跡もない。

「お前……、腕が……」

「……」

先程大尉が感じた違和感とはこれだった。お茶を受け取らなかったのもそのせいだ。一方少年はそれを忌ま忌ましげに見る様なことはなかった。

少年は両腕失つたらしく、垂れ下がった袖をなおせなかった。リザが気遣い、それをなおす。

「何があつた」

「……」

「……何か言ったらどうだね？」

少年は一瞬何か考える様に空を見上げると、そのままテーブルの脚を軽く蹴った。その動作は不規則に行われ、けれどもリズム良く音が鳴らされた。

こん、と脚を蹴り終えた後に少年はふっと浅く息を吐き、立ち上がる。それと同時にロイも立ち上がった。

「行こう、大尉」

「は？何を言っているのですか！？」

「命令だ。黙ってついて来い。ブレダ、留守を頼む」

少年はロイのその言葉を聞くと、密かに口角を上げた。

「まあ、大尉がいるからいいんですけど、早く帰ってきてくださいね」

ロイはブレダとすれ違いざまにひらりと手を振った。

准将と大尉は少年に連れられるまま、街の人気の無い廃工場へ来ていた。

「准将」

リザはロイに耳打ちする。

「どづいづことですか？」

「さっきあの子は脚を蹴っていただろう？あれはモールス信号なのだよ。『オレに興味が湧いたなら、ついて来い。錬金術師なら尚更な』とな」

「新手のテロでは？」

「可能性はあるかもしれんな。信号を出した理由がわからん」

少年が足を止めた。目的地に着いた様だ。少年が身を翻す。

「始めまして。オレはノワール・ホックス。不法侵入で殺さずにいさせてくれて礼を言っぜ」

これが少年の発した最初の言葉だった。ノワール・ホックスと名乗る少年は深々と頭を下げた。

「軍部と知って入って来たのかね？」

「まさか。寒いし、腹減ってたし、眠たかったから、適当に入っただけだ」

ノワールは肩をすくめ、鼻を鳴らした。

「警備の者がいたのにか？」

「警備？ははっ！そんな堂々に入るかよ」

「ほう。どうやって入ったのかわからんが、まずは君の出所を知ることが先だな」

ロイの目つきががらりと変わった途端、ノワールの表情が曇った。

「……わかんねェんだよなア。これだけではどう思い出そうとしても、記憶が途切れちまう」

ノワールの紅い瞳が澱んでいく。瞳の中に深い闇が広がっているよ

う。

「だけど、一つだけわかることがあるんだよなア。それが此処にあるわけだ」

ノワールが倉庫を横目でみる。二人の予想が徐々に悪い方へ向かう。

第二話 謎の少年（後書き）

主人公の

ノワール・ホックスは

ノワール…フランス語で黒。

ホックス…めっちゃ簡単に作りました。

第三話 ノワール（前書き）

今話は色々設定込み入ってます。

ちょっと長いかもしれません……

第三話 ノワール

「大尉、見張りを頼む」

「了解」

ロイはりざとの短いやり取りを終えると、古い金属扉を開けた。埃っぽい空気と共に、血生臭い湿った臭いが鼻の奥についた。

「人体錬成の陣か……！」

二人の悪い予想通りの光景が広がっていた。倉庫の中心には何者かの血溜まりが出来ていた。

「あまり驚いてねエな。もしかして、あんたも経験あるのかな？」

ノワールはその陣の中心に立ち、冷酷な笑みを浮かべてロイの顔を覗き込む。

「……。お前は何を錬成した？」

「オレはオレを錬成した。何の為かは忘れちゃった。なんせ代価にしたのは御察しの通りこの両腕と」

ノワールは自らの頭を見る様に上部を見た。

「『大部分の記憶』なわけで」

「……ノワール。自分自身を錬成するには、入口と出口が必要だろう？どうやって戻ってこれた？」

「大方、出口を錬成したんじゃないエの？」

ロイは曖昧なノワールの発言に呆れ、ため息をついた。

「何を覚えている？」

「自分自身の事が少々、錬金術、真理、…くらいかな？」

「ほう、親や住所は？」

「さあ？親はいたような、いなかったような……。住所はないからいないんじゃない？」

ロイは一層険しい顔になる。

「軍部で信号を使った理由は？お前は何者だ？」

「……言えねエな」

「何故だ」

「見ず知らずの奴に情報をほいほい教える程オレは馬鹿じゃねエし、お人好しじゃねエ。それに不公平だが。あんたは聞き、オレが答える。オレにメリツトが皆無じゃねエか」

ノワールは少し不機嫌になり反論する。確かに誰でもこのような尋問紛いを受けると、不機嫌になるものだ。

不意に扉の外で銃の安全装置を外す音がノワールとロイの耳に入る。

「どうした」

「いえ、何か気配を感じたので」

リザの言う通りで辺りは人一人いないのだが、どこか殺気じみたものが充満している。

「中々勘が良いな。そうさ、この辺りは今の世の中のやり方が気に食わないテロリストの巣窟だぜ。奴サンはご丁寧に狙撃する気マンマンらしい」

そういうノワールの目線の先には割れた窓ガラスの向こうから銃を向け、こちらの様子を伺っている。

「だが、我々を殺すには力不足だな。こちらには『鷹の目』と呼ばれた大尉がいるからな」

「へえ、あんたが『鷹の目』」

ノワールは二人に聞き取れない音量で呟いた。

「……で？あんたは何の錬金術使うんだ？」

ロイは右手をポケットから手を出す。すでにその手には錬成陣が書かれた手袋を装着している。そこに這っている火蜥蜴が生き生きと躍動感を醸し出している。

「久々にこの焰が使えるそうだ」

「いい歳してはしゃぎ過ぎないでくださいね」

「わかってるよ。大尉、援護を頼む」

「言われなくとも」

ロイとりざはノワールをよそにテロリスト鎮圧に走った。

「あーあ、置いてきぼりですか？」

二人の背中を見送ったノワールだったが、多数の背後の気配に振り向いた。

「まア、こっちも好きに暴れるとしますかね」

「よっ、と」

ノワールは腕のないハンデを背負ってるにも係わらず、大勢の大人達を伸していった。

「オラオラア！手応えのある奴アいねエかア！？」

「なんだ！？このガキ！化け物か！？」

ノワールの動きは見事なもので、男の首に脚でクリンチし、そのまま身体を捻って頸骨を折ったり、巧みに足払いや脚のみで投げ技を掛けたりするなど、戦術に長けていた。

「何押されてやがる！相手は子供だ！」

テロリストが次々に銃を構え、ノワールに発砲する。
ノワールは銃弾を避けるも、頭部に一発銃弾が貫いた。

ノワールの身体がぐらりと傾き、倒れるかとその場の皆がそう思った。が、ノワールの身体は脚で踏ん張り、倒れなかった。

「……いつてエな。一回死んじゃったじゃねエか。」

ノワールの傷口から赤い閃光が迸ったかと思うと、すぐさま傷は塞がった。だが、それだけでは留まらず、ノワールの姿が変化していく。

「てめえらの冥土の土産にオレの本体見せてやる」

テロリストの前に現れたモノは、尖った耳に、頬まで裂けた口、吊り上がった目、風になびく金色の毛、極めつけは尻から生える九本の尻尾。

「化け物め……！」

熱を纏った巨大な狐だった。

第三話 ノワール（後書き）

あれ？

エンヴィーのパクリじゃね？

と思ったあなた！

後々少しだけ違ったりするかもしれませんがね。

第四話 焼け焦げた地面（前書き）

突然ですが、最近、小説執筆しているおかげなのか作文を書くのが早くなりました。

私、感想文書くのが苦手なんです……。

第四話 焼け焦げた地面

「あらかた片付いたな」

「そうですね」

ロイは戦闘で乱れた襟を正す。

「他愛のない。運動不足の私にはもう少し粘って欲しかったのだがな」

ロイ達はテロリストを気絶までに止め、捕縛は応援の憲兵に任せた。

「准将、あの男の子は……？」

「しまった！！置いてきた！！」

「全くもう！だから無能なんですよ！」

二人は慌てて倉庫付近へ走った。テロリスト鎮圧という戦火の中、まだ幼い少年が無事いる訳がないのだ。

「無能は雨の日だけで充分なんですから！」

「上官を無能無能って君ね……」

「戦闘の中で子供一人置いていく人に無能以外に何か当てはまりますか！？」

「……ハイ。スミマセン……」

ノワールのもといた倉庫へ戻ってきたが倉庫の中にはノワールはおらなかった。

「手遅れですか……」

「いや、あれは何だ？」

ロイが目にしたのは、道の角からするりと伸びる、一本の尻尾の様な物であった。

リザは銃を構え、ロイは発火布をはめ直し、そこへ足を忍ばせる。

二人で息を合わせ飛び出すと、何事もなかった様な顔で佇み、こちらへ振り返っていた。

「あ、れ？」

「終わった？」

ノワールの前には気味が悪くなる程に何もなかった。

だが、壁は燃やした様に焦げ付き、地面には巨大な生き物の足跡が残っている。

「え？あ、ああ。お前は何ともないのか？」

「おかげさまで。で？禁忌を犯したオレを憲兵に突き出すのか？」

ロイはしばらく考え込む。

「いや、私がしばらく預かる。こんな多芸多才な奴をおめおめと憲兵に明け渡すのは味気無いのでね」

「知らねエよ？オレがこんな奴だつても」

ノワールは大きく口を開けて、鋭い犬歯を剥く。

「私を舐めてもらつては困る。私も様々な奴と戦ってきたのだよ」

「あそ。じゃ、よろしく頼まア」

ノワールの飄々とした態度に拍子抜けする一同だった。

「……意外とあっさりなんだな。プライドとかないのかね？」

「住むところねえし、その上、牢獄行きじゃなけりや食い尽くさないだろ。それが釣り糸に垂らされた餌だとわかっていても」

「よかるう、ついて来い。ノワール」

「へーへー」

そうロイの後ろでけだるげに返事するノワールの冷たい笑みに気付くものは誰もいない。

第四話 焼け焦げた地面（後書き）

短かったですね。

すみません……>（――）<

第五話 一抹の夢（前書き）

ああ、

ついにこの時期が……

期末テスト！（、、）

勉強漬けの日々が再び。

今話ノワールの主観ありです。

第五話 一抹の夢

「……というわけでこいつは私が預かることになった」

指令室は静まり返った。一人の子供を指差し、突然そう宣言されて驚くと言うのが無理な話である。

「あ、そうですか。とでも言えると思ってるんですかあ!？」

もちろん、人体錬成した等のことはふせてるので、傍から見ればただの連れ子にしか見えないわけで。

「結局、あんたの子かよ! 相手は誰ですか!？」

以上に食いつきがいい男、ジャン・ハボック少尉。

この男は人造人間との闘いで脊髄を損傷し、下半身不随になり、一

時軍から離れた。人造人間との闘いの後、ドクター・マルコーの持っていた賢者の石という、術法増幅器で回復した。
現在は厳しいリハビリの末、松葉杖で移動が可能になった。

「ねえ、ボク。お母さんってどんな人？癖のある髪してるから、お母さんは天然パ……」

ノワールはその話し方、髪質のワードを聞いた瞬間、額に青筋を立て、ハボツクの顔面を足で蹴飛ばした。

「オイ、コラ。天パって言葉、二度とオレの前で使うな。天パの気持ちは短髪野郎にわかるかアア！！」

軍内では一切口をきかなかったはずなのに、天然パーマと言う言葉で一転し、指令室中に怒号が響いた。

ノワールはぎりぎり歯を軋ませ、まだ収まりが効かずにロイに襟首を掴まれている。

「落ち着け、ノワール。……はあ、鋼のと同じだな。まったく……」

ロイは前髪をかき上げ、大きなため息をついた。

「ノワール、お前は今どうしたい」

「とりあえず、あの野郎をボコボコにしたい」

「いや、そういう事じゃなくて……」

「じゃあ……刀返せ。そんでもって寝たい」

「武器はダメだ。部屋なら……」

外を見ると日はまだ高い。

ロイはどうしたものかと考える。早退できればいいのだが、生憎、今日はやり溜めた書類が山の様に積み上がっているし、朝から指令部を出たため、それはできないのだ。

「隣の部屋を使うがいい。あれはほとんど私物みたいなものでね」

そう、指令室の隣はロイに調べ物がある時によく使う部屋で、その最中は一切の立ち入りを禁ずる為、普段から皆入るうとはしないのだ。

「鍵を……おっと、その腕じゃ無理だったな。すまない」

ノワールはぴくりと耳が動いた。ロイの物言いに腹を立てたらしい。舌打ちが派手に聞こえた。

「いい。自分で開けれる」

ノワールはずんずんとロイ達の前を横切ると、扉を蹴破り、廊下へと消えていった。

「怒っちゃいましたね。息子さん反抗期ですか？」

ハボックは厭らしい笑みを浮かべ、ロイの脇腹をつついた。

「消し炭にされたいのか。貴様は」

「……すいませーん」

ノワールは指令室の隣の部屋の扉の前に立った。

しかし、扉を開けるための鍵を受け取らず、更にはノブを捻る腕も無い。

人気が無いのを確認した後、ノワールの足元から青い閃光が走った。それは扉を這い、ノブへ集まる。

閃光が止むと、ノワールは扉にもたれる。すると、なぜだか鍵が掛かっていたはずの扉がゆっくりと開いた。

同じように扉を閉めると、扉からかしゃりと金属音が聞こえた。

どうやら扉の仕組みを変えたいらしい。

「はあ、人間ほど腹立つものはねえな」

ノワールは部屋を見渡す。

部屋には書類ばかりだが、錬金術に関する物だったり、何かのメモだったり、ロイの物だと思われる報告書の山が積み上がっていた。

ノワールは隠されている様に奥にしまい込んである報告書を見つけた。

「『約束の日』……ねえ」

ノワールは寝る気は毛頭なかった。この国のこと、権力者は誰なのかを知りたかったのだ。

ノワールはその書類を器用に足の指で引っ張り出すと、床に座り、読み耽った。

出ていけ！この化け物が！！

うるせエよ

お前、死にかけだな。

誰だ。この金髪ジジイ

人間卒業したんだ。おめでとう。ノワール。

懐かしいな。誰だっけ？

我らは死んでもこの事は忘れない！
神が必ずやお前に鉄槌を下すだろう！！

オレが何かしましたか？

等価交換だ。錬金術師

お前はあの時の……！

「……！！」

…夢かよ。紛らわしい。

しかし、随分懐かしい夢だったな。全く記憶に無いけど。
つか、寝るつもりなかったんだけど。
お疲れなのか？オレ。

ま、暗号化された書類は全部解読し終わって、惰眠でも貪ってたんだろ。

元大統領とその息子さんが人造人間……。こんな書類置いておいて

いいのか？

重大機密情報だろが。

お父様とやらは鋼の錬金術師エドワード・エルリックその他諸々が倒したと。

誰のパピーを倒したんだ？

人のお父さんに乱暴しちゃいけませんよ。全く。

とりあえずあの二人だ。

元国家錬金術師に鷹の目。

どえらい戦争で活躍した奴か……。

……どえらい戦争って何だっけ？

記憶持つて行かれすぎだろ！

しかも、両腕無しって不便にも程があるわ！

もう一回人体錬成してやろうか！

話が反れた。

まずオレが此処にいる理由は、自分を知ること。
これただ一つだ。

多少はわかる。

オレは人間じゃなく、人造人間だということ。
人体錬成し、記憶と両腕を持って行かれた。

だけど、何の為に？

今のオレ現状は把握できる。だけど、過去の記憶が皆無に等しい。
自分の年齢、出身、親さえ知らない。

なぜ、オレは自分自身を錬成したのだろうか。

何の為に、都合の悪い情報を忘れ去りたかっただけなのか。

それを知る為に此処にいる。

良い目標だろうか？

それを見つけるまでオレは死なないし、死ねない。

……簡単に死ぬような身体ではないんだけど。

軍部に来たのはたまたまだったが、今は軍人に付いていれば何か得られるかと思ったのは当たりだな。

この『約束の日』が引っ掛かる。

後で問い質してやる。

第五話 一抹の夢（後書き）

テスト期間なのでUP率低下します。
m () m

第六話 目的（前書き）

期末テスト終わったー！（ノ＞＜）ノ

後は点数の問題ですね（＜ー＞）

うわーん（ー）

相変わらず文章崩壊しています。ご了承くださいませ。

第六話 目的

書類室の扉が叩かれたのは、ノワールが起きて随分と時間が経った後だった。

だが、ノワールは窓のない、空しく電球が垂れ下がっているこの部屋では、自分がどのくらい寝ていたのか、どのくらいこの部屋で資料を読み漁っていたのか、全く予想がつかなかった。

「ノワール、開けたまえ。私だ」

扉の向こうからくぐもった低い声が部屋の空気を揺らす。ロイだ。

ノワールは立ち上がると、扉にもたれ、ノブ部分に意識を集中させた。

扉は閃光を散らした後、ノブがあることを意に介さず開いた。

「何？」

廊下の窓から見える外の風景はもつすっかり暗くなっていて、街灯が点々と道に沿って点いている。

「何って、私の仕事片付いたから帰るのだが？」

「オレも行くのか？」

「仕方ないだろう。私が預かると言ったんだ。それに行く宛てがないだろう？」

ノワールは大袈裟にため息をついて見せた。

「あんな。誰に対してもそんな感じなのか？
オレがどこの馬の骨かも知らねエのに」

「ああ、そうだな。だから私の家でじっくり聞こうと思ってな」

ノワールの口の端が吊り上がる。

ノワールに対してもロイの家に行くのは好都合なのだ。

「丁度いい。オレも聞きたいことが山ほどあったとこだ」

ぱちんと明かりのスイッチの片側を起こす。暗闇に慣れてしまったノワールの目に光が刺す。

「うへえ、殺風景な部屋だな」

ロイの家は、生活に必要な最低限の物しか置いておらず、壁はコンクリートが剥き出しで、棚には薄く埃が乗っている。ソファで寝ているらしく、ベッドはない。屋内には、錬金術だったり、仕事の事であろう本やら紙やらが散乱しきっている。

まさに朝は仕事に出掛け、晩は家に帰って寝るだけの生活をこの部屋は物語っている。

「あんた、此処に女の子呼んだことねエだろ。幻滅すること間違い無しだぜ」

「必要ないものはいらん」

「……あんたいくつよ？」

ノワールはさして興味はなかったが、生活感はなく、ましてや女のいた形跡のない部屋を見れば、聞きたくもなるものだ。

「事実上29だが」

「そりゃあ嫁さんいねエ訳だわ」

「ダチも呼べねー」と、ノワールはあらかじめ肩を竦めた。

「お前に心配される程でもない」

「いつでも出来るってか。余裕ぶってたら仕舞いには一人だぜ？」

「ノワール、お前いくつだ？」

ノワールの発言はどこか大人びていて、目に余るところがある。

「……憶測で構わんよ」

ノワールは片眉を上げ、肩を上げて見せた。

「それも忘れたのか」

「……まあな、どうやらオレも今の必要の無い記憶は持ってかれたらしい」

しばらく気まずい空気が続いた。お互い核心を突きすぎて収拾がつかなくなってしまったのだ。

「まあいい、それは後で聞くとする。とりあえず、シャワー浴びて来い。服も用意してやるから、それを何とかしろ」

ノワールの着物は自らの血液らしい物がこびりつき、乾いて固まっていた。

「いいよ。これで」

「お前な。晩だったから良かったものの、昼間にその格好で出歩いてみる。目立つじゃあ済まされないぞ」

想像してみよう。

血塗ろの少年が白昼堂々と街中を歩いて見たらどうなるだろうか。当然、道行く人々はそれを好奇の目を向けるであろう。その挙げ句、憲兵に職務質問を受け、最悪連行。

「ああ、そうだね。じゃあ、お言葉に甘えるわ」

ノワールは手をひらつと振ると、シャワールを探して奥へと消えた。

しかし、ノワールは何者だろうか。

自分を錬成し、代価は取られたものの、真理の扉一つで帰って来られるとは……

鋼の場合はアルフォンスとの精神の混線で出入り口が確保出来たから戻ってこれた。

だが、ノワールは単独で行った。

ノワールにも扉が二つあるのだろうか。

ということは、人体錬成を過去に一回多人数で行ったということだろうか。

本人はもう一つ錬成したと言っていたが、想像だろう。

私も不本意ながら扉を開けさせられた際に中身を見たが、あの膨大な情報の塊を錬成するなど不可能に近い。

まず、その抗生物質はなんだ？代価は？

謎が多過ぎる。

ばたん

奥から物音がした。
ノワールが出て来た。

「いや、でっけーよ。お子様の身長舐めてんの？」

ロイがノワールに貸した服は、ロイにしては小さいものの、大人サイズ。当然でかい。

ノワールは、だぼだぼのズボンの裾を引きずり、袖が無様に垂れ下がっている。

何故かノワールは不機嫌そうに眉を吊り上げながら歩いてきた。

「腕無しでよく着れたな」

「服なんざ慣れりゃ足だけで着れるわ！それより水だよ！どうやっ

て拭くんだよ！特に頭！」

服には水を吸ったであろう染みがそこら中についている。ノワールの赤い髪からは絶え間無く水が滴り落ちる。

「呼べば行つたのに……」

「呼んだよ！散々！だけど誰かさんは考え事して全く気付いてなかったけどな！」

ノワールは薄情者が！と叫びながら頭を振る。水をきった形跡のない髪から大量の水滴が四方に飛び散る。

「悪い悪い。拭いてやるから待ってる」

ロイはそれ程急ぐ様子もなくタオルを手に取り、わしわしと赤髪から水気を取っていく。

「心配りなつてねエなあ。あんた女にはさりげない気遣いはお手の物だろ？」

「ほう？根拠はあるのか？」

「女の匂いが鼻に付くわ。オレ、五感は鋭い方だから」

「……お前は犬か」

「あと、焰^ひの匂い。あれがそうか？」

ノワールはロイが脱ぎ捨てた軍服の山に埋もれている発火布の手袋を一瞥する。

「私は少し前まで二つ名は『焰』だったのだよ」

「ほー。じゃあ焰の錬金術師か。……！」

ノワールの頭の中で何かが垣間見える。それは、微かな映像となつてノワールの中を馳せ巡った。

ほんと、大した男だね。焰の大佐は。

焰？

あら？ノワールは知らなかったかしら？ロイ・マスタング大佐。焰の錬金術師よ

「ロイ・マスタング……焰の錬金術師……」

「どうした？」

「……いや、何でもねエ」

ノワールが見たのは薄暗い空間の中で誰かと会話をしているものだった。

相手はわからない。

わかるのは大人の女の声だということのみ。

「ノワール、今の自分自身の事で何かわかるか？」

ロイは水分を吸いきってすっかり重くなったタオルをソファアの背に掛けた。

「わかってるのはオレがホ………ノワール・ホックスという『人間』で、錬金術はお手の物。年齢、出所、両親はわからない」

ノワールは自然と口から出かけた人造人間という言葉辛うじて飲み込んだ。

「あと、オレは人体錬成したけど、人を甦らすことは不可能って知ってんぜ」

「甦らそうとしたことがあるのか」

「ねエよ。多分な。不可能な事をやったって無理なモンは無理だ」

ロイはこの生まれて10年と少しの少年が錬金術に詳しいのか、不思議に思った。

それに人体錬成という禁忌まで成し得ている。
更に謎は深まるばかりだ。

「真理は見たか」

「ああ、見たぜ。えげつない情報量だ。おかげでこいう事も出来るけどな。」

ノワールの話終わると同時に、ロイから借りている服の大きさを変え、自らの体のサイズに合わせた。

「な……！ノーモーションで術が発動したと！？」

「腕が無くたって術は発動するんだぜ。（ま、ノーモーションなのはまた別の理由があるんだけど）」

「ノーモーションってことは賢者の石か？いや、あれはもうないはずだ」

ロイは錬金術師特有の思考に耽る。
錬金術師という生き物はあらゆる可能性を求めるものなのだ。

ノワール思考に耽るロイに密かに口角を吊り上げる。

（一丁鎌ア掛けてみるか）

「なあ、もしオレがその賢者の石を持っているとしたら、あんたはどうする？」

「ありえんな」

「『もし』だよ」

「無論、内乱や紛争で負傷した人々の治療に充てる」

ノワールは鳩が豆鉄砲を食らったように、きょとんとし、狂った様に笑い出した。

「ははっ！それ本気か？錬金術師ってのはもっと自己中なモンかと思っていたけどな。こりゃあオレの見当違いだったね」

「どついう意味だ」

「くくつ。まあまあ。あんた、狗でいるけど目標とか……野望とかあるわけ？」

「大總統になるのは随分と先になるだろうが、平和な世の中を作るのが目標かな？」

ロイはどこか遠くを見るように目を細める。

「よし、乗ってやるよ」

「は？」

「オレにも一枚噛ませろつってんだよ。協力してやる」

ノワールの顔が緩む中、未だに訳がわからず黙っているロイであった。

第六話 目的（後書き）

今回一気に三話投稿します！！o(^-^)o
テスト期間中に密かに執筆してたり……（汗）

第七話 最後の人造人間（前書き）

今話のサブタイ、サブタイじゃないですね。（・・・）

メインになっちゃってます。（、、）

七話にはあの有名なワンちゃんがちょろっとでます。

第七話 最後の人造人間

ノワールは殺風景な部屋の中、ソファアにどっかりと踏ん反り返る。

「協力？君はまだ子供だろう？何をしようというのかね？」

「オレの目的はオレを知るためだ。そのためなら、あんたという方が都合がいいし、それにただの子供じゃねー」

「首の後ろ、見てみ」と、ノワールは身を翻す。

ロイは何の事か全く予想がつかないが、言われた通りにノワールの少し長い髪を避けてみる。

そこには尾を飲み込む蛇の入れ墨がそこに佇んでいた。

「ウロボロスの入れ墨！ホムンクルス人造人間か！」

「御名答！オレは『最後の人造人間』だ。あ、だからといってあんたらを殺しに来た訳じゃないから。あくまでもオレの目的はオレを知るためだからな」

「勘違いすんなよ」と、ロイに釘を刺す。

「元は人間なのか？」

「知らねエよ。それが知れてエんだっつーの」

「では、『ノワール・ホックス』は偽名か？」

「半分本当で半分嘘だ。オレの名は『ノワール（黒）』だ」

紅い眼光がロイの視界で映える。ロイの目が紅い宝玉魅入られたかのように逸らせなくなった。

「さつき、あんたという方が都合がいいつつたが、オレの正体、口外したらどうなるか。わかってんだろぅなァ」

ノワールから黒い殺気じみた何かが醸し出される。それは今まで相手にしてきた人造人間と大差ない。

「ああ、わかっている」

「そ。じゃあオレはあんたが出来ねエ事をし、あんたはオレの正体の詮索の協力。それ以外は口出しはしねエし、される事もねエ。これでいいか？」

ノワールはロイに承諾の意を込め、視線を向ける。もうノワールから殺気は漏れていない。

「いいだろう。もし約束を破れば、全力でお前を潰す。いいな」

「おー。全然OKだぜ。一言はねエよ」

ふあっ、とノワールは欠伸を漏らすと重苦しい灰色の天井を仰いだ。

「んじゃ。早速、独身子持ち男の生活の為にリフォーム開始だな」

ノワールの周囲から青い光が走ったかと思うと同時に部屋の内装がみるみるうちに姿を変える。

「ふいー。これでどうかな？体、休めるぐらいは出来るだろ」

部屋は至って質素だが、寝具に、食器などを錬成し、壁一面には暖色系の壁紙が貼り付けられた。

「おお、これは有り難いな」

「気に入って頂けたようで何よりだ」

ノワールは新品同様になったソファアに横になると、瞼を伏せた。

「晩御飯はいらんのか？」

「必要ねー。その変わり……明日…聞きたい事があるから…よろしく…」

一通り話し終わるとノワールは寝息を立て、眠りについた。

ロイはノワールの無防備な寝顔に笑みが零れる。

「とても人造人間とは思えんな」

その人造人間にロイは毛布を掛けてやった。

ノワールは暗闇に立っていた。
光の射さない暗闇に。

「んあ？」

『立つ』というより、
『いる』のが正しいだろう。

「おい、どこだ？ここ。何も見えねー」

『久しいな。ノワール』

地鳴りの様な声が闇にこだまする。

「あい？」

途端に視界が開け、辺りが伺えるようになる。

「見えなきゃよかった……」

ノワールが見てしまったものとは、延々と人型の魂が阿鼻叫喚する空間。常人はそれで気分が悪くなるぐらいだ。

その空間を割いて姿を現したのは八つの巨大な影。

それらは他の魂たちの物とは別物で、人の形を成さないものばかりであった。

「初めて会った気しねエ、っていうか、は？久しぶり？」

その中でも際立って大きいのは九本の尾の狐の姿を模したものだった。

『ああ、そうさ。俺達はノワールと200年間の付き合いだからな』

「へえ、オレ結構年食ってたんだねエ」

『まあ、人造人間、だからな』

「つーこたアよ。あんたらは賢者の石か？」

『そう。ただの人間、と獣たちの生命エネルギーだな。それはそうと、お前、記憶喪失前に俺達と取引した話、覚えてるか？』

九尾の狐はノワールとの取り留めのない話の中でも、苛立つ事もなく淡々たる口調で話を進める。

「あー。どっかでそんなことしたような、しなかったような…」

『全く。相変わらずいい加減だな。まあいい、それは身についているだろうから心配いらんな。では、ノワール、本題へ行こうか』

「
」!

ノワールは眠りから覚め、勢い良く半身を起こす。

(……? 何の夢だったっけ?)

外を見れば、陽のやわらかい光が街を包み、小鳥が囀っている。

「良く眠れたかね?」

「ああ。安眠じゃなかったがな」

舌打ちを一つしたノワールは首を回す。頸椎の関節が鳴る音がはつきりとロイにも聞こえた。

「私に聞きたいことがあるなら早く支度しろ。私の副官は遅刻とサボりに厳しいんだ」

ロイはりざに戦々恐々としているようで、若干トーンが高めである。

コンコンと扉を叩く音が聞こえると、急に焦り出すロイであった。

「まだか！？来てしまった出はないか！」

「おーおー。今行く。あ、そうだ。一つ忠告忘れてた」

ロイはいやらしく笑うノワールに不信感を覚えた。

「
」

「いいだろう……！」

「うーす。姐ちゃん」

「おはよう。ノワール君」

リザは仕事の顔と打って変わった人受けのいい笑顔で軽く挨拶を交わす。

ノワールはリザの後ろで蠢く小さな影を見付けた。

「ん？犬……」

「私の愛犬よ。仕事場に連れていつてるんだけど、今日はどつしたのかしら。何かに脅えてるみたい……」

「……。名前は？」

「『ブラックハヤテ号』よ」

「ブラッ……！」

リザのネーミングセンスに凍りつくノワールであった。

「…よろしく。ブ、ブラックハヤテ号」

ノワールがハヤテ号の顔を覗き込む。

だが、ハヤテ号はそれを拒絶するかのように歯を剥き、ノワールの鼻先に噛み付こうとする。間一髪、ノワールはそれを躲したが、ハヤテ号は全身の毛を逆立てて吠える。

「ハヤテ号！めっ！」

リザが吠えるのを止めるよう、叱ってもハヤテ号はそれをやめようとはしない。

「あ、えーと……なんかごめん」

「ホント、今日はどうしたのかしら」

二人と一匹が争っている横で、ロイは直立不動の姿勢で立っている。

「……准将もどうしたのですか？朝からそんなに汗をかいて」

「い、いや。動物の本能って凄いな。って思った、だけ、だが……？」

「？」

ロイの謎の発言にリザは疑問に思った。

しかし、リザにはそれをゆっくり聞く間もなかった。

ハヤテ号は結局、はりざの厳しい躰（調教）により、一事収まりはついたが、ノワールはハヤテ号に警戒されるはめになった。

第七話 最後の人造人間（後書き）

どうでしたか？（・・・；）

いや、支離滅裂なのは元より承知しています。（
――）

次話更新はすぐにすると思います。

第八話 それぞれの魂（前書き）

というわけで、前話の更新から約5分で投稿という相変わらずの不
定期更新……（-.-.-;）

ああ、（、、（

何と言っことか。（T T）

第八話 それぞれの魂

「で？あれがこうで、こうなってる？」

「そうだ。あ、大尉。お茶を頼む」

「はい」

指令室で慌ただしくロイの部下たちが歩き回る。

その中でノワールはロイの側で座り、足を延ばしてくつろぐ。

「准将お。サボらんでくださいよお。また徹夜になりますよ」

その中でハボックは煙草を加え、書類の山と睨む。

「やかましい！黙って手を動かせ！」

「あーもう！話が進まねエよ！！おい、ハヤテ号！遊べ！」

青筋を立て、発狂したノワールはハヤテ号を追いかけ回す。
ハヤテ号はノワールの中を感じ取り、一定距離を置いて逃げ出す。

勿論、書類の紙々が散乱し、舞い散る。

事態が收拾が収まらなくなった頃、銃声が二つ、東方司令部に響き渡る。

一同はぴたりと動きを止め、その音の主を恐る恐る見遣る。

「ちょっと目を離せばすぐにこれ。皆さん、何を考えているのですか？」

そこには般若の如し表情で静かな怒りを表に出したりザが銃口から硝煙を吹かして立っていた。

「ノワール君？ハヤテ号？ここは公園じゃないのよ？」

「す、すいません」

ロイは書類のサインを続けながら、ちらりとノワールに一瞥をやる。

「ったく、ひやひやしたぞ」

ロイは側にくっついて腰を据えているノワールと密かに会話する。

「まだ許容範囲内だ。まだ……な」

「優しいんだな」

「オレが言ったのはもっと悪意のこもったやつだよ。それにあれは……さすがにオレが悪いかも」

「今の仕事が終わったら、外へ視察に行くのだが……来るか？」

「もちろんだ。それまで寝るから起こせよ？」

「わかった」

ノワールはロイの返事を確認すると、壁に持たれてすぐに寝息をたて眠った。

「よく寝ますね」

リザが書類の回収ついでにノワールの様子を見に来る。

「ああ、そつだな。どこかの錬金術師とそつくりだ」

「元気にしてるでしょうか？」

ロイは紙に走らせたペンから手を離し、そのまま両手を頭の後ろで組んだ。

ロイの体重を支える椅子の背もたれがぎしりと軋む。

「元気に決まってる。あの兄弟は。それに静かなのは性に合わないだろう」

「そつですね」

窓から漏れた金色の光があゝの二人の風采を思わせた。

「あとですよ。サボらないでくださいね」

リザの抑揚のない声音と共に手渡された紙束は、ロイの一気に不快度を増した。

「まだあるのかね……」

「これだけです。それが終わったら外へ視察なので」

ロイは横で口を開けて眠るノワールをちらりと見ると、書きかけの書類の上にぽつねんと転がったペンを握る。

「では、早く終わらせなければな」

「珍しいですね」

「未来を担う子供が来てるんだ。いいところを見せたくもなるだろう？」

「雨が降らなきゃいいですけど」

「君ね……」

平然と憎まれ口を叩くりザにロイは溜め息を吐いた。

「おい、コラ。出てこいや」

ノワールは再び暗闇の中にいた。ノワールは九尾の狐を呼び出すため、闇に叫ぶ。

『何だまた来たのか』

闇から狐の影が現れる。相変わらずでかい。

「ざけんじゃねエよ。こっちは前に話した内容全く覚えてねエんだ
よ」

『ふむ、そうか。それは好都合だな』

「ふざけんな。何もわからんまま生きて行く気はねエぜ」

謎の空間の中、ノワールは住み慣れたわが家の様に寝そべる。

「てめえらの名前すら知らねェしな」

ノワールの紅い眼光が狐の影を映す。

『てめえら……ということは俺達も指してんのか？』

ノワールの八方から下卑た笑いがこだまする。
以前に狐の側にいた他の七つの影だ。

『五世紀生きててなーんも変わんねえな。あんたは』

「てめえらのおかげでな」

『余計な話はよせ《破壊デストロイ》』

『うるせーや。てめえは感情なさすぎなんだよ！』

影たちがあれやこれやと口論しだし、話が進まなくなる。

「うるせー！人の中で喧嘩するんじゃないねー！誰かまとめて名乗れや
」！」

『それもそうだな。俺は《冷血クルエル》、こっちのバカは《破壊デストロイ》、お前の後ろにいるやつが《忠義ローヤル》と《狂喜エクスタシー》』

『バカってなんだ。バカって』

デストロイと言う影はクルエル程、影が霑がかかったようにはつきりしない。

『で、基本常に喋らん奴らが《恐怖テラー》、《虚無エンプティ》、《孤独アローン》これら全て……いや、他の魂もお前の中の賢者

の石だ』

ノワールはゆっくりと立ち上がり、魂たちを見渡す。

「……そうか。まだ生きてるんだな」

魂の全てが静かにノワールの方へ見る。誰も叫ばず、誰も泣かない。
ノワールの言葉をみんな待っているのだ。

「護ってやるよ。あんたらを。誰も死なせねエ」

『やはり、お前は変わらないな。俺が唯一誇る人間。《以前のお前》
《に言われた通り俺達は力を貸そう》』

「おい、……きろ。…ノワール」

「ん？」

ノワール目覚めた頃には、日が真上を通っていた。
人々が街を行き交い、活気がつく頃だ。

「行くぞ」

「あい、わかった」

ロイは羽を伸ばす鳥の様に伸びをするノワールの表情が少し嬉々と
していることに気が付いた。

「どうした？」

「いや、良い夢を見ただけだ」

ノワールは笑みを浮かべたまま、軽い足取りで部屋を出て行った。

第八話 それぞれの魂（後書き）

ノワールの中の賢者の石には個性的な奴らが、多いんですよ。

これからどうなるか楽しみにしてください。たら幸いです。

第九話 友（前書き）

一気に投稿し過ぎたかも知れません。（・・・）

でも、フラストレーション溜まりまくっていたので、それが一気に放出したんですね。＼（^^：；）

今話ありえない事が起こります。

そこであの名言を！

『ありえない事はありえない！』

第九話 友

「うわー。モテモテだねー。准将サンはよオ」

街への視察は困難を喫していた。

一歩歩けば街の端から若い女性が黄色い声を上げて駆け寄ってくるのだ。

ロイもロイで、その女性の一人に声を掛けてはまた次の女性へと、次々に女性達を虜にしていくな。

もちろん女性にとって邪魔な者は弾き出していく、すでにノワールはその状態であった。

「やれ英雄だ、やれ焰の准将だ、やかましいたらありゃあしねエ」

その蚊帳の外であるノワールとリザは、もはや神を崇める宗教団体のようになった集団を眺める。

「男に媚びて金をせしめるのがそんなに楽しいことかね。だからあ
あいう女は嫌いなんだ。補佐もクソもねエよ。なあ、大尉サン」

「昔はもつとマシだったのだけれど、今はこの国の英雄なのよね。
仕方ないわ」

人造人間が闊歩していた時代が終焉を迎え、正義を掲げた革命軍が
活躍すれば、ロイが英雄と言つ名が世に馳せる事がリザには目に見
えていたのだろう。

「『えーゆー』ねえ…」

リザはとても退屈そうにしゃがんでロイの様子を眺めるノワールの
横で姿勢正しく立つ。

「だけど、いいの？お仕事進まねエよ？」

「そうね、そろそろ勤務に戻らないと」

リザが愛用の拳銃ホルダーから取り出す。ノワールは後に退き、
「また？」と脂汗をかく。

「おっと、怖い補佐官が呼んでるから私は行くよ。じゃあね」

「「「えー！！」」」

女性達が驚きの声をあげる中、ノワールは目を丸くした。

ロイはこちらを見ていなかったのにも関わらず、リザが銃を手にしただけでロイはあっさりと切り上げて戻って来たのだ。銃声も上げずにだ。

「え？何で？え？」

「遊ぶのもほどほどにしてくださいね」

「ははは、すまないね」

ロイはノワールにしたり顔を向ける。一方ノワールは未だになぜなのかわかっていない。

「何で？何でだ？？」

「寄りたい所があるのだが、いいかね？」

リザは時期からしてロイが何をしたいのか容易に予想できた。

それでなのか、リザは要求に黙認した。

「あ？オレア別に構わねーよ」

「すまないね」

ロイは力無く笑うと、花屋の初老の女性に声をかける。

「ご婦人。花を一束くれるかな？」

「はいよ。何にする？恋人にプレゼントかい？」

「いや、ちよつと墓参りさ」

「はい、350セズ。お兄さん、あんまり気負っちゃいかんよ」

ロイは小銭をポケットから取り出すと、店員の女性に手渡した。

「努力するよ」

ロイはそのまま背中越しに手を振った。

ロイの歩く後ろでノワールは黙って着いていく。

着いた先は雑草などが丁寧に刈り取られ管理された墓地であった。

ロイは迷わずある墓石の前で立ち止まる。

だが、そこには先約があり、その石碑の前に若い女性と、その子供らしい幼子がいた。

「あら、マスタングさん。お久しぶりです」

「グレイシアじゃないか。元気にしてたかい？」

「ええ。おかげさまで」

「エリシアも大きくなったな」

「えへへ」

ロイはエリシアという子を高く持ち上げる。エリシアは小さな手の平を思い切り広げて喜んだ。

「もうすぐ一年になるんですね」

グレイシアがぽつりと言葉を落とす。それに呼応して、ロイもリザも気を落とし、マース・ヒューズと彫られた石碑を見る。

「ああ、早いな」

「色々、ありましたから……」

そう笑って見せるグレイシアの目には涙が溜まっていた。

「そうだな」

ロイは胸ポケットからヒューズと昔に撮った写真を取り出す。それをノワールは下から覗いていた。

「そちらの子は？」

グレイシアはロイの影に隠れていたノワールの存在に気が付いた。

「内戦で両親を失ったんでね。それで身寄りのないこの子を引き取ったんだよ」

「ノワール、です」

軽く頭を下げたノワールにグレイシアは、その目線に合わせて赤い髪に触れ、優しく撫でた。

「そう。よろしくね。ノワール君」

ノワールは恥ずかしそうに口を真一文字に引き結んだ。

「では、私はこれで」

「もう行くのか?」

「はい。あまり長居していると下から嫉妬して夫が出て来そうですから」

この状況で冗談を言えるグレイシアにロイは喉を鳴らして笑った。

「バイバイ」

エリシアは懸命に小さな手をロイ達に振り、またノワール以外のロイとリザもエリシアに手を振り返す。

双方の間に憂愁の風が哀しく吹き抜けた。

グレイシアとエリシアがいなくなっただけからロイは、石碑の前に花を沿えてその場から一切動かない。

今にも心が折れそうなロイを支えるかの様にリザはその側に立つ。

「全く、二人揃ってなーに辛気臭い顔してるんだか」

ノワールはヒューズの墓石の裏側に持たれて、太陽が灰色の雲に隠れてしまった空を仰ぐ。

「お前には私の気持ちはわからんよ」

「ダチだろ？ だったらなおさらそんな顔で死者の前に現れるな。ヒューズだっけ？ よっぽど面倒見が良さそうだな。どうせ余計な事に首を突っ込んで……」

「黙れ、ノワール。お前に何がわかる。知ったような口を叩くな」

ロイの声が震えているのがわかる。それどころか、力が入った手でさえ震えている。

「だからこそだろ。面倒見が良いこいつだからこそ、そんな顔で来られると心配して逝けねーんだよ！」

ノワールが声を荒げる。今まで人の為に怒鳴った事などなかったはずだったのにだ。

ぽつりぽつりと大粒の雨が降り、虚しい世界に濃い斑点をつけていく。

「ヒューズはもういないんだ！死んだ者は喋らない！お前がヒューズの偽りの代弁者をするな！」

ノワールが奥歯を音が鳴るほど噛み締める。だが、自分を落ち着かせるように長い息を吐くと、先程のような怒鳴り声を出す様子はない。

「『死人に口なし』。確かにな。だけど口がないことをいいことに、死者に自分の辛みを押し付けてるんじゃないか？わかってないのはあんただろ」

ノワールの辛辣な言葉は今のロイの胸に痛いぐらいに突き刺さった。だが、その言葉はロイの奥底の暗きを照らし、緩解していく。

「……」

驟雨が止み、分厚い雲が太陽から外れかけた頃、ノワールはふりふらりと立ち上がり、墓地から遠退いた。

「……准将」

リザは持参していたハンカチをロイに差し出した。

「……少し乱暴な言い方だが、また救われた気がするよ」

ロイもノワールの仕草を真似て、空を仰いだ。

「……もう雨は上がりましたか？」

「ああ、清々しい程、晴れた空だ」

まるでロイの言葉に答えるように、雲の切れ間から太陽の陽射しがヒューズの墓とロイに下りる。

優しく凪いだ風がロイの心の中に巣くっていた僅かな闇を拭い去っていくようだった。

「ヒューズさんよオ、あれでよかったのかね？」

ノワールは墓地を去り際に亡きヒューズに声を掛けた。

『ああ、ちよいと口は悪かったがな。これでロイもふっ切れる。あと、お前のプレゼント、気に入った。また来いよ。ロイと一緒に』

その声を聞いてか聞かずか、ノワールはふっ、と笑うと墓地を去った。

「准将、こんな所に彫刻なんてありましたっけ？」

ロイはリザの指差す、墓碑の裏側を見る。

そこには幸せそうな笑顔を浮かべて並ぶ、 그레이シア、 エリシア、 ヒューズの姿。

その家族ともう一つ

ヒューズの隣には共に肩を組む、もう一人の男の姿もあった。

「……。ああ、あったよ。ヒューズも知らない間にな」

第九話 友（後書き）

はい、ノワールは墓碑の裏側にロイさんとヒューズ一家を掘ったんですね。

私にとってヒューズさんの最期はとても衝撃でした。

ロイさんと話しもせず^ずに逝ってしまったのが悲しくて、今話^{はな}にヒューズさんの言葉を放り込んでみました。

みなさんの想像とは掛け離れていると思いますが、少しでも楽しめたのなら幸いです。

第十話 記憶の大樹（前書き）

驟雨を読めなかった方、
読み方と意味を載せておきます。

《驟雨》 しゅうつ

急に降りだして、すぐにやんでしまつ雨。にわか雨。

第十話 記憶の大樹

まだ驟雨の余韻の残る若い木の枝に幹に登り、背を持たれて腰掛け
る。

木漏れ日が濡れた体に調度よく体に射す。

しかし、墓場つてのがこんなにも気分が悪かったのか。怖いわけじ
やないけど。

賢者の石の中に生きてるとは言え似たような奴らがいるからなのか、
精神と肉体から切り離された魂とやらがわんさかいる感覚。体がざ
わざわする。

もう一つ、大切な人に取り残された人間は弱くて脆い。

見えて吐き気がする。

確かにさっきはヒューズさんの魂の叫びを代弁をしたのかもしれない。
い。

だけど、死んだ者に未練がましく、あれこれ思うのは頂けない。

いないものはいない。

そんなこと誰でもわかってる。割り切れないだけで。

でも一番腹が立つのは、オレだ。

何故あそこまでヒューズさんの代弁してしまったのだろうか。

ただの利害関係であるあいつらに少なからず心の安らぎを与えた。
そしてこのオレからあんな言葉が出たなんて。

何もしなければいいものを……。

大切な人が困っていたら助けてしまふ。それがあなたたち人間
なのです

ちっ、また、まただ。

今回はガンガンと頭が痛い。誰だよ。お前。

私は《傲慢プライド》。《黒ノワール》、ですね。よろしくお
願いします。

プライド……だと？

人造人間か……！

オレの記憶喪失前の仲間……なのか？

それに何だって？

『あなたたち』……？

オレも？

……たとえば、プライドの言う通りだとしてもオレは納得できない。

大切な人だア？

ふざけるな。

オレはオレの為に生きる。

それ以外は、何も、いない。
護るものなんざ、いない。

「ノワール君、どこへ行ったのでしょうか？」

墓地を後にしたロイとリザは、街に出た。だが、ノワールは墓地でロイらと離れてから見かけない。

「すぐに戻って来るだろう」

「だいいですけど。それにあの物言いは……」

リザのノワールに対して疑問を抱き始めていた。
ノワールには何かある。

何かはわからない。
ただ不思議なのだ。

あの幼い少年が人の死について語り、ロイの心情だつて説き伏せてみせた。

普通に生きてきた子にはとてもできる業じゃない。

まるで自分も同じ経験をしたかの様に……。

「イシュヴァール人ではないよな」

ロイもノワールの事を考えていたようだ。伊達に長い時間一緒にいたわけではない。

「瞳は紅いですが、褐色の肌じゃありませんし……。混血の可能性はありますね」

「やはり、何も覚えていないというのは痛いな」

「そうですね」

偶然、ロイの前を見慣れた中年男性が通りかかる。

「ドクター・マルコーじゃありませんか」

「おお、マスタング准将。ご無沙汰しております」

本名ティム・マルコー、元国家錬金術師。かつて軍の研究機関で『賢者の石』を作っていた男である。

非人道的な行いをしていたことは裏腹に、イシュヴァール殲滅戦で生きた人間が材料である賢者の石が使われたすと、その罪悪感から逃げ出し、田舎の町医者として過ごしていた。
根は心優しい男性である。

「仕事は順調ですかね？」

「少しずつですがね」

ロイは情けないと言った様子で髪を掻きむしる。

「そうだドクター。記憶喪失した奴の治療法はありますか？」

「え？何故そんなことを？」

「いやあ、ちょっと変わった奴がしまして。司令部の方に忍び込んでいたんですよ。そいつがまた本当に記憶がないらしくてですね」

「うーん。私はそっちの方は詳しくないんですが……。強いショックを与えるといいらしいですよ」

「強いショック？」

マルコーは顔の前に指を立てた。

「えーと。例えば外傷的ショック。頭を思い切り打つとかだね。あとは心理的、精神的ショック。催眠術とかかけてみるといういかもしれません。時間が経つと思ひ出す事もありますかね」

ロイは顎に手を当てて自身の思考を混ぜながらも、マルコーの話をしっかりと頭に叩き込んだ。

「人間の記憶とは大樹みたいなもので、何本も枝が張り巡らされていて複雑に入り組んでるんです。記憶喪失の患者はその大樹が揺れ動いていないのです。ですが、その枝を一本でもざわめかせたら次第に他の枝も揺れ動くものですよ」

マルコーの話から推測すると、ノワールはまだ末端の枝が弓なりにしなつて引つ張られ、弾かれるのをまだかまだかと待ち続けている状態なのだろうか。

あくまでも推測だが……。

「なるほど、参考になります。お忙しいところ時間を取って頂いてありがとうございます」

「いえいえ、お役に立てて光栄です。頑張ってください」

「それじゃ、私はこれで」と、マルコーは雑踏に紛れて行くのを口イは。

「一本の枝を揺らすのにどれだけかかるのだろうか……」

「人によって木は様々。その枝が私たちの手の届く高さにあるのでしょうか？」

「なんとしても届かせてみせるさ」

ロイは黄昏に向かう街に悠々と足跡を残して歩いて行った。

だが、その様子を見る怪しい影に一人は知る由もなかった。

「決行の時が来た。ロイ・マスタングを始末しろ」

第十話 記憶の大樹（後書き）

ハラハラドキドキで終わらしてみました（＜|＞）

次はいつ投稿するかわかりませんが……

みなさん、期待してまっけてくださーい！ 〓（ノ><）ノ

第十一話 熱波と寒波（前書き）

今日はクリスマスイヴ！！〇（ ）〇

キリストさんが生まれた日の前日！〇（^ - ^〇）（〇^ - ^）〇

そこで某番組を見てて思ったんですが、ていうか、ホントにどうでもいいんですが、

ガーフィールさんって、

某オネエタレントの
ラクダとマングローブを足して、
筋張った顔と身長を残して割った
カンジですよ（笑）

第十一話 熱波と寒波

「何だ!？」

一発の銃声に街中はどよめきと緊張が走る。

ロイは破裂音のした方を見る。ロイからかなり距離がある三階建ての誰も使っていない建物からだった。

弾は当たっていない。

だが、イシュヴァール政策を取り組む中でロイのやり方に反対する者もいるのでロイが狙われたのは確かだ。

「大尉!」

ロイは錬成陣が描かれた発火布の手袋を付け、リザは腰のホルダーから二丁の拳銃を取出す。

「了解！」

皆まで言わずとも、といった様子で凜と返事を返したりざだった。

「な……！」

ロイを狙っていた狙撃手は冷たいコンクリートに伏し、首領と思われる男が短い悲鳴を上げる。

なぜなら、さっきまで構えていたライフル銃が発砲と同時に真つ二つにへし折れ、爆発したのだ。

「おー、危ねエ。あいつは殺すなよ」

窓の縁に立っているのは、紅目赤髪のノワールだった。

首領の男は、ノワールが逆光で見えないらしく、手を翳している。

「誰だ！」

「通りすがりのクソガキ」

ノワールは窓の縁から建物の中に侵入し、ライフルの爆発を受けた狙撃手の頭を片足で踏み付ける。

その足は先程の爆発したライフル銃の破片が突き刺さり、どくどくと鮮血が流れている。しかし、ノワールはそれをものもしない上、治そうともしない。

「街中でライフルぶっ放すとかやめなさいよ。人に当たったらどうするのさ。お母さん、上からへし折るのどんだけ大変だったか。あ

「あなた、わからないでしょ？」

テロリスト集団は戦闘体勢に入っているが、ノワールのまさかの発言に全員固まる。

「……っていう冗談はここまでにして」

ノワールはすうつ、と大きく息を吸う。

「今日は大事な話してんのに邪魔が入って全く進まねエし、誰かサンは女にちやほやされて一步も歩かねエし、墓場連れていかれるなり説教垂れなきゃなんなかったし、襲撃止めようとして足怪我するし、もう散々なわけ。だからあんたらオレの憂さ晴らしの為、死刑な」

何とも無茶苦茶な理由の死刑宣告。

「子供が一人で何ができる？」

部屋に銃や手榴弾、ナイフなど武装した男たちがぞろぞろ入ってくる。

「天涯孤独の餓鬼ナメンじゃねエぞ」

クルエル。腕が欲しい。できるか？

『任せろ』

部屋の熱気が朱く灯る。ノワールの両端にそれは集まり、五本の鉤爪ができていく。

「何だありゃあ!？」

部屋の熱気が部屋から無くなると同時に冷気が部屋に漂う。テロリ

ストの息は白い霧になった。

『すまん。言いにくいが、これには欠点があつてな』

「は？」

『勿論、無から有は作れない。だから、お前の腕は実質、実体じゃないし、熱気がお前に集中するから熱が体に籠る。その上、熱を抜かれるから周りは超寒くなる。長引けば死ぬぞ』

「欠点が多いじゃねエかアアア！」

そう叫ぶノワールの額には体に溜まる暑さのせいですでに大量の汗をかいている。

「ま、錬金術これが使えたら文句は言わねエけどなっ！」

実体の無い手を合わせ、床に手を当て、外へ繋がる全ての出口を塞いだ。

『お前、こんなことしなくても術は使えるではないか』

「いやあ、ノーモーションでの術の発動は肌に合わねえんだよな」

ノワールは熱の五本の鉤爪で頭を掻き回した。

「何ごちやごちや言っただ！やれ！」

首領の鶴の一声でテロリストは一斉に攻撃に入る。が、皮膚に刺すような寒さの中で皆動きが鈍くなっている。

「はっ！足が震えた状態でオレを殺れるかよ！」

「う……」

「ふいー、リーダーさんよオ、降参するか？」

ノワールの足元には男共が伸びきり、さらに手足を錬金術で床に縛られるという甚だ呆気なく勝負はついたのだが、首領の男には降参の余地を与えてやった。

「ぐっ……！」

「どうする？降参するか、こいつらみたいになるか」

ノワールの目が紅く光る。首領は悪寒がはしり、恐怖でがたがたと震える。

「餓鬼にやられるわけにはいかないんだ！」

首領はそう叫ぶと拳銃を構えた。ノワールは短く溜め息をつくど、銃弾を避けようと膝を曲げる。

「大人しくしろ！」

ノワールの背後で出口を塞いだ壁が開かれ、聞き慣れてしまった声が聞こえるのと発砲するのはほぼ同時であった。

運悪く、ノワールと援護にやってきた者と、発射された銃弾の一直線上にあった。

「やべっ！」

ノワールが避ければ後ろの者に当たる。だが、そのままそこにいればノワールに着弾するのは確かだ。

「（仕方ねエ。一発死んでや……）ぐえっ！」

突然、襟首を捕まれ、後に引かれる。ノワールの視界が逆転した。目の前から弾丸が消え、灰色の壁が眼前に広がった。廊下まで退いたらしい。

ノワールは青い軍服にすっぽりと包まれ、あまりの出来事に茫然とする。

「危なかったな」

ノワールを後ろから抱いたのは、皆さんの御察しの通りロイである。

「危なかったな。じゃねエよ！あんたさえ来なけりや今頃あいつボッコボコにしてたっつーの！」

「お前、熱いぞ。それに何だ？この異常な寒さは」

ノワールの一方的な喧騒の中で銃声が二発鳴り響く。

「うおっ！」

ノワールは耳をつんざく轟音に思わず耳を塞ぐ。

「心配は無用。大尉だ」

二つの薬莢が地面で跳ね、しばらくすると、あの男らしき悲鳴が轟いた。決着がついたのだ。

片付いたかとロイが確認しに立ち上がると、同調してノワールも

立ち上がるが、すぐに座り込んでしまう。

「どうした？」

ノワールの疲労が、荒い息と汗となって出し切った水分が物語っている。

「……いや、気にすんな」

その原因である熱の腕はまだ解こつとしない。

そのまま、ロイの後に足取りが覚束ないまま付いていく。

「私が目的かね？」

男は右手と左股を押さえて尻を据えている。リザに撃たれたのだから。そこら中に血痕が散っている。流石、鷹の目と言ったところだ。

「……始めはそうだったかな」

「始めは？」

男の妙な言い回しがロイの勘に触った。

「……その化け物さ」

男はノワールの方を見る。ノワールは相変わらず荒い息のままだ。

「何故？」

「……」

険しい顔でだんまりを決め込む男に、我慢ならなかったノワールがロイとリザの間を疾風の如く駆け抜けた。

「言え！言わねエとその喉笛焼き切るぞ！！」

ノワールは男を蹴り倒すと、男の上に馬乗りになってその喉に更に赤みを増した熱の腕をかける。

男はその熱さと皮膚が爛れていく苦痛に、悲鳴の様な声を上げた。

「わかった！話す！話すからやめてくれ！！」

その男の悲痛な叫びにノワールは腕を離し、男から降りる。

だが、男はそのまま起き上がると、懐から手榴弾を取り出し安全ピンを引き抜いた。

「なっ……！！」

ノワールはロイとリザを部屋の外へ蹴り飛ばし、防御壁を錬成した。手榴弾の爆風や熱波が三人を襲う。

その中、二人はノワールが機転を利かしたおかげで無事であった。

「無事か！？大尉！ノワール！」

「はい。私は大丈夫です。准将はお怪我は？」

「私は大丈夫だ。ノワールは？」

パラパラと塗装が剥がれ落ちる部屋から微かに声が聞こえる。

「こつちだ。くそが……。仲間ごと自決しやがった。一つも情報は残さねエってか」

ノワールは瓦礫の中に埋もれていた。ノワールの目の下に隈がはっ

ている。

気が付けば、極寒の地の様な気温から一転し、ごく普通の暖かい空気に戻っていた。

「ノワール！待ってる！今すぐ出してやる」

ロイは手を打ち鳴らすと、ノワールの上にのしかかっている瓦礫を床で錬成した柱で持ち上げる。

「お前何で再……」

再生しないのかと言いかけた口をつむぐ。まだここにはリザがいる。ノワールが人造人間ということは口外してはいけない。

「うるせエ」

ふらふらで起きてるのがやっとの状態なのに、まだノワールは立ち

上がろうとする。

未だにライフル銃の破片が刺さったままの足はノワールが無理に飛び回ったせいで、痛々しく傷口が広がっていた。

そのあまりの痛みの為、立ち上がったとしてもすぐに膝から崩れ落ちる。

「ちきしょー、情けねー……」

そのまま、倒れるとノワールは目を閉じて気を失ってしまった。

第十一話 熱波と寒波（後書き）

クリスマスシーズンなので明日も番外編として投稿したいと思います
（＾Ｏ＾）／

多分…… f ^
| ^ ;

番外編1 クリスマス（前書き）

クリスマス遅刻した！（、、）

友達とワイワイガヤガヤとやったあと、帰ってきたら10時30分
（＜―＞）

腱鞘炎なりそうぐらいボタン連打したんですが、間に合わなかつ
た（――）

クリスマスイヴのお話です

番外編1 クリスマス

「今日はクリスマスなんだってな。宗教なんざ興味はねエけど」

指令室のソファでノワールは足を組み、日めくりカレンダーを眺めている。

「私はあるぞ」

「錬金術師なのに、カミサマを信仰するのか？」

「いや、私が興味あるのはクリスマスという名のイベントだ。クリスマスは降誕祭、記念すべき日だ。ということは男女同士のプレゼント交換があるだろう？私はそれが目当てなのだよ！」

「あそ、結局は女目当てかよ。せっかくの番外編だぜ？もっとダラ

ダラダラダラやっていこうぜ。めんどくせエ」

「いや！私は行くぞ！待ってる、街の女性たち！」

ロイは朗らかに高笑いしながら、指令室を脱兎の如く走り去って行った。

ノワールは部屋の窓からまだ日が高いにも関わらず、赤や緑の紙で装飾された箱をせっせと車へ運ぶ様子を眺めている。

「あー、もー。めんどくせエよ。何なんだよ、どいつもこいつもクリスマスだかなんだか知らねエけど内も外も浮かれやがって。何それ？おいしいの？って感じだぜ全く。なア、おっさんたち？」

ノワールはくだらねエ、とため息をつき、部屋に視線を戻したが、その途端、ノワールの濁った目が更に澱んだ。

「……何やってんの？」

ノワールが見たものとは、ロイの部下、リザ、ブレダ、フュリー、ハボック、ファルマンが樅の木に電極や飾りを付けている姿。

「せっかくのクリスマスなんだから楽しもうと思ってね。ノワール君もやらない？」

フュリーがリースを部屋の扉に持っていく。殊の外、皆は乗り気であり、あれやこれやと言い合いながら、どんどん飾り付けが進んでいく。

「やんねエよ。つか誰だ？このおっさん。カーネ○・サ○ダース？」

ノワールは目を細めて真っ赤な服装の白い髭をたくわえたクリスマス象徴と言える中年男性を見る。

「サンタだよ。僕的にはそっちを知ってる方が驚きなんだけど」

「なんじゃそらっ。」

「『サンタクロース』クリスマスの前の夜にいい子の元へプレゼントを持ってやってくる伝説の人物。セイント・ニコラス」

ファルマンはここぞとばかりにサンタクロースの概略を説明する。

「何それ。義賊？」

「普通に見ればそうだろうね。だけど、一年に一回の特別な日だから、友人や恋人同士でプレゼント交換したりするんだ」

ノワールは体を折り、反動を付けてロイの机に飛び乗る。

「ふーん。じゃあ尚更オレには関係無い話だな」

「え？なんで？」

「だってオレ、少しもいい子じゃねえし、家族も愛人もましてや友達なんていねえもん」

机の上で胡座をかいて、にへらと笑うノワールに一同はどこか心が痛んだ。

そこにリザはノワールの目線に合わせて屈み込むと、ノワールの頭に手を乗せた。

「関係ないことないわ。だって、今日は国のみんなにとって特別な日なもの」

ノワールは少しむず痒そうに体を捻り、口を尖らせた。

日が落ち、街の電極が派手に瞬き人々を魅了する頃、ロイは大量の紙袋と紙箱を持って帰ってきた。

「いやあ、沢山貰って帰ってきてしまったよ」

「けっ！女タラシが」

ノワールはロイに向かって檄を飛ばす。

「そう怒るなよ。お前たちに色々買ってきたんだ」

そう言って、ロイは部下たちに大きさがそれぞれ別々の箱を渡していく。

その様子を見たノワールは目を丸めて不思議そうに眺めている。

「ほら、ノワール。いらんのか？」

「……」

箱を差し出すロイの手を見ずに、目を伏せ気味で、やれオレの好きなメーカーの煙草だの、やれ美味しい酒だの喜んでるいる男たちを遠目で見ている。

「……悪いけど、オレにはそれを受け取る資格も嬉しいなんて感情もねエんだ。つくづく難儀な体だぜ。こんな時だったのに感謝の言葉も、苛立って殴り飛ばす腕もねエなんてよ」

ロイにはノワールが、素直に喜ぶのが照れ臭く、仲間にも入りたいのに入れないただの意地っ張りな子供にしか見えなかった。

「お前も行ってみたらどうだ？今日はお前の日みたいなものなんだぞ」

ノワールは毛程も自分の心情を表に出さないのはわかっているが、ロイはこの冷血で不死身とも言えるこの少年の何かを変えたかったのである。

ノワールは歓喜に溢れる男たちから目を逸らし、仏頂面で天井を仰ぎ見る。そのまま、肺いっぱい空気を吸うと、ゆっくりそれを吐き出した。

「……しゃあねエ。白ひげのジジイには癪だが、オレの日だってんなら参加しないこともねエな」

ノワールは机から素早く飛び降りると疾風の如き速さで男たちに走り寄って行った。

「オルアアア！てめエらで勝手に盛り上がってんじゃねエや！オレも混ぜやがれエエエ！」

こうして、たった一人のが加勢した故に一瞬にして指令室は彼の独壇場と成り変わった。

端から見ていたロイはノワールの顔に柔らかな笑顔が垣間見えた気がした。

「ノワール！。ケーキ食うか？」

「食い物？オレはいいわ。遠慮する」

「そう堅くなんって、まずいもんじゃあねえからさ」

「いらねーって。オレはもう十分だ」

番外編1 クリスマス（後書き）

マスタング組のプレゼント紹介しておきますo（^-^）o

ノワール……着流し（血まみれになったから）

リザS……爽やかめの香水（理由は後で）

ハボックS……煙草ワンカートン（イメージのまま）

ブレダS……バーボン（体型的に）

フュリース……スペア眼鏡（リザSにブツ壊されたから）

ファルマンS……手袋&マフラー（北国用）

ハヤテ号……高級骨付き肉（餌です）

ロイさんにはリザさんにきつと硝煙が染み付いているのを多かれ少なかれ責任を感じてると思うんですよ。

なので、私はキツすぎない香水を渡して欲しいと思って文章にしました。

クリスマスに遅刻しましたが、楽しんで読んでいただけたら幸いです。m（――）m

第十二話 セリム・ブラッドレイ（前書き）

はい、まさかの深夜投稿（-|-#）

軽く眠いです（-）zzz

何でこんな時間まで起きてるかというと、大胆おわかりでしょうが、冬休みなんですよね（-）

宿題しろ、って感じでしょ？ f^_^ | ^ ;

今回はちょっと頑張っていていつもより長めです m（——） m

第十二話 セリム・ブラッドレイ

「……んだ。…っちは……えぞ」

朝明けの霧が晴れるような意識の中、覚醒中の脳には酷な大音量での会話が鼓膜を揺らした。

「……るっせエなア。やかましくて寝れやしねー」

ノワールは大音量のやり取りで目を覚ます。大事な安眠を邪魔されてなのか、不機嫌そうに眉をひそめている。

「お、起きたか。なら、さっさと出てってくれ」

「……おっさん、誰？」

頭が朦朧とする中でノワールの視界に捉えたのは、嫌と言うほど見た軍服姿のロイとリザ。その隣で煙草を加え、白髪混じりの頭にだらし無い無精髭の眼鏡を掛けた中年の男性。

ロイが其奴の傍にいるということは敵ではないのだろう。

「共犯者のノックス。身元不明のお前を治療できるところがないのでな。知り合いに頼んだんだ」

ノワールはゆっくりと上半身を起こす。ふあっ、とけだるそうに大きな欠伸を漏らす。

「まさか三日間寝るとは思わなかったがな」

「げっ、マジでか。オレ、どんだけ？」

ノワールも三日間寝っぱなしはさすがに迷惑を掛けたのかも。と、ノックスが使っているのであろうベッドから降りる。

ノワールが二本足で床に立つも、足に電撃が走り、うずくまる。

「……………っ痛エ！」

「あまり無理して歩かねえ方がいいぞ……………って言っても遅いか。杖
使え」

「遠慮する」

若干、涙目でありながらもそこは誠意を持って断る。恐らく、それ
だけが理由ではないのだろうが。

「何意気がつてんだ。地に足付いてんのもやっとだろうに」

「……………」

傍らでノワールの様子を他人事の様に眺めていたロイだったが、切りのないやり取りに呆れ、行動に移す。

「ならば、こうすれば良いのだろうか？」

ロイはノワールを荷物を小脇に抱える様に持ち上げる。勿論、これを許す訳が無く、じたばたと足をばたつかせる。

「ふっざけんな！！降ろせや！ゴルア！！」

「おー怖い怖い。では、私はこれで」

「離せエエエ！！」

ロイは胸ポケットから分厚い封筒を抜き出し、薄くホコリが乗ったテーブルに置き去る。

「おっさん。ありがとな」

玄関口の扉が閉まりかけた時、ノワールの明るい声がノックスの耳にまで届いた。

「クソガキが。無茶すんじゃないやねえよ……」

「乗れたまえ」

ロイは少々強引に車に乗せる。弾みでノワールの怪我をした足が車の内装に当たる。

「いつてエな！！コノヤロオ！！」

「元気がいいな」

「うるせエ！！寝起き搔つ攫われてキレねエ奴がおるかア！！」

ロイに向けて怒鳴り散らすノワールをよそに車はエンジンを唸らせて走る。

車は司令部へ向かうと思いきや、そこを通り過ぎてしまう。

「…………どこに行くんだ？」

ロイらの謎の行動に疑問を感じたノワールは罵るのを止め、鏡越し

にロイを見る。

二日前

指令室にけたたましい金属音が鳴り響く。ロイは黒光りするそれを手を取った。

「もしも…「あ！マスタング君！？僕なんだけどね」

ロイの言葉を遮り、耳をつんざく程明るく大きな声。

「大總統閣下じゃありませんか」

大總統閣下でロイの上司。グラマンである。軍中では変人と名高い老人。約束の日の際にロイと組んでクーデターを起こした人物だ。今はイシュヴァール政策で東方司令部に赴任してきたロイに代わって大總統となっている。

「いやあ、勤務中にゴメンね」

「いえいえ、ちょうど休憩していたところですよ」

「君に頼み事があってね。明後日ブラッドレイ夫人の所へ行くんだけど、急に用事が入っちゃってさ。マスタング君、行ってきてくれない？」

ロイは焦った。一度、保護したとはいえ、人質を捕った事があるのだ。

「えっ！私は……」

「そういう事だから、後はよろしくね」

受話器の奥でがちゃんと強引に電話の終了を告げる音がロイへ届いた。

そのことにロイはため息をつくしかなかった。

「……というわけだ」

それを聞いてノワールもため息をつく。

「……オレを連れ出すってこたア、オレに有益なもんがあるってことか。それに強引に連れ出すのも何か訳があんのか？」

「訳は後で話そう。全てお前の言う通りだ。そこにはセリムがいる」

「誰？」

「本当の名は《傲慢プライド》。人造人間だ」

ノワールは目を丸くする。一方でリザはそれに食ってかかった。

「准将！！機密情報ですよ！それを何も関係ない子に。あなたは何も話そうとしないし……っ！」

ロイは走らせていた車を急停止させた。

「黙っててくれ」

「でも！」

「黙れと言っている！」

ロイはハンドルを車内が震撼させる程叩く。手を震わせ、歯を食いしばる。

「……頼む。命令だ」

「っ………承知しました」

リザはそんなロイの様子を見て、拳を作った。

「あのー。盛り上がってる所にすっげえ悪イんだけど……」

ロイの背後からぐもったノワールの声が聞こえた。後ろを見ると、ノワールは底へ顔から落ちていて身動きが取れない状態になっていた。

「助けてエ……」

車を走らせながら私には考えさせられる事があった。

先日のノワールと取引をした際の事だ。

一つ目は、ノワールが人造人間だということを誰にも口外してはいけないという事。

二つ目は、その翌日に家を出る際に交わした会話の内容だ。今思えば恐ろしい忠告だった。

「あ、そうだ。一つ忠告忘れてた」

「何だ」

「もし、あんたの部下、知り合いや友達がおれの事を穿鑿^{せんさく}したり、武器を向けた場合、やりたくねエがおれはそいつを躊躇い無く殺す」

とても冷酷な目だった。とても嘘をついているとは思えない程に。

「なっ……！」

私を怯ませるには十分過ぎて、あまりに急な忠告だった。

この時点で私は窮地に立たされていたのだ。

私の部下にもノワールが人造人間だと言うことを悟られずに、しかも、ノワールが何者なのかわからぬ内に銃を向ければ、その者が殺される。

まるで、私と大尉の為に言われた様な忠告だ。

三日前のテロリスト襲撃の後にも、ノワールの姿に付いて聞かれた。それについては私も知らなかったが、その際も察してくれと頼んだ。人質をとられているのだ。何も言える訳がない。

記憶が飛んでも人造人間。残忍さは変わらないな。

「いいだろう……！」

私はそれを受け入れた。

否、受け入れなくても、ノワールはそれをするだろう。自分を知られる事はメリットにはならない。

故に受け入れるしかなかったのだ。

それが今、とてつもない重荷となってしまうている。

ノワールはひとまず許した様であったが、このままだと大尉の命が危ない。

というか、それ以前に大尉にきつい命令を強いてしまった。

理由も話せずに黙れと、一言で片付けてしまった。

たとえ、長年の付き合いである、大尉との信頼を裏切るようなものだ。

ノワールと交渉する余地はあるのだろうか。

その材料にプライドに合わすのだが、プライドはノワールの事を覚えていたのだろうか。

覚えてもらわなければ困るがな。

おっと、ブラッドレイ邸が見えてきた。

はたして、あの門が栄光の門なのか、悪鬼のはびこる鬼門か……。

「ご夫人。グラマン閣下が変わって本日は私が視察に参りました。

SPがロイらの回りを囲んでいる。

「あら、ホークアイ大尉もいらしたの？」

ブラッドレイ夫人は二人が思っていたのと違い、幼子を抱き抱えている。見た目は三ヶ月ぐらいの赤ん坊だ。

「先日は失礼しました」

ノワール以外は深々と夫人に頭を下げる。その時にロイは耳打ちする。

「夫人が抱いているのがセリムだ」

「ふーん」

ノワールは不服そうに口角を下げる。

「いいのよ。むしろ感謝してるくらいよ。ところで、その子は？」

夫人はノワールを指す。ノワールは困惑したようで、ロイを一瞬見る。

「オレ。ノワールってんだ」

夫人はノワールの名を聞くと、驚愕して口に手を当てた。

「まあ！あなたがノワール君ね？」

「は？」

ノワールはあんぐりと口を開けた。何故、会ったことも無いであるう夫人が自分の事を知っているのだろうか、謎だった。

「うちのセリムから話は聞いていたのよ。クラスで一番走るのが速いって」

「……。そ、そうなんだ！オレ、セリムとよく競走したんだ！アハ

「ハハ！」

ノワールは人格が入れ代わったかのように、口調や表情が豹変する。だが、それは突発的に始めた演技らしく、冷や汗をかいて目を回している。

「そうなの。今はもういないけど、セリムも喜んでいるわ」

「ねえ。赤ちゃん抱かしてくれない？オレ、赤ちゃん抱いてみたかったんだ！」

無邪気に歯を剥いて笑うノワールに夫人は快くセリムと思われる赤ん坊を手渡してくれた。

SPでさえ、ノワールの演技に誰も反応しない。

「そうだわ！ノワール君、軍人さんのお話が終わるまでしばらくその子の面倒みててくれないかしら？」

「うんー！」

ノワールはセリムを抱き抱えたまま、庭の人気の無い場所へ走り去って行った。

こうして、ノワールは見事にセリムを奪ってみせた。

「すみませんね。無神経な奴で」

「あら、マスタング准将のお子さんだったんですか？」

「いえ、私の遠縁の子ですよ。たまたま遊びに来たのでね。連れて来てしまいましたよ」

夫人たちは談笑に花を咲かせた。

「ここまで来れば大丈夫かな？」

芝生が生い茂る所にセリムをそつと置いた。

「おい、セリム。いや、プライドか？」

ノワールはセリムに腕を組んで声を掛けるが、セリム自身はじつとノワールの目を見続けている。

「いや、反応無しかよ！純真無垢な瞳だな！オレみたいに濁ってなくていいな！」

ノワールはここでやっとセリムの額にある発疹のような桃色の出っ張りを見付けた。

「何コレ。押したい衝動に駆られるんですけど。押していいかな？押しちゃうよ？」

ノワールは震えた手でそれを押した。

「はい。ポチっとな」

「お久しぶりですね。《黒ノワール》」

先程の純真無垢な瞳とは打って変わり、闇の深淵のような濁った瞳に変わった。

「よお。《傲慢プライド》さん」

「あなたがここに来るのは予想外ですね。焔の准将の手下なんですか？」

「いや、ありゃあオレの手だ。オレ、記憶がごっそり抜けてよ。何か手掛かりは無いかとあんたの所へ来たんだが」

セリム、いや、プライドは嫌らしく口角を上げる。

「『人体錬成』したんですね？」

「ああ、自分をな。それ以来、過去を忘れちゃった。だから、教えてくれねエかい？オレは自分を知りてエだけだ」

セリムは一つ息をつく。何か企んでいるようだ。

「では、条件があります」

「悪いけど、いつまでもその格好で喋るのやめてくんね？笑い堪えるの必死なんだけど」

セリムはノワールが芝生に寝かせたまま赤ん坊らしく手足を縮こませる状態で話し合っている為、見た目と口調の差が激しく、腹の底から笑いが込み上げてくる。

ノワールは木の下へ移動すると、木の幹を背もたれにする様に座らせた。

「条件はなんだ？」

「賢者の石を譲って頂きたいのです」

「オカンを殺すのか？」

プライドはノワールへため息をつく、短く小さな手を空へ翳す。

「相変わらずそういう風にしか思わないんですね。違います。護る為に欲しいのです」

「は？《人造人間ホームンクルス》のお前がか？」

ノワールは訳がわからないといった様子で肩を竦める。

「私にはもう一人分の賢者の石しかありません。それも寿命はあと僅か。今私が死んでしまえば、また母を泣かせてしまうでしょう？」

ノワールは芝生の上で、胡座をかい、つまらなさそうに聞いている。

「それに、私は一度死にました。傲慢と言う大罪を背負って生きるのには十分過ぎます」

ノワールは胡座の体制から、一心に陽の光を浴びようとするかの様に仰向けに寝転がる。

「……お前、変わったな」

プライドもノワールの行動に釣られて空を見る。

「そうですね？だとしたら変えられたんだと思います。それに貴方も同じだと思えますよ」

「は？オレが？何で？」

プライドの突拍子も無い発言にノワールは思わず間抜けな声を出してしまう。

「……いえ、何でもありません」

「んだよ。気になるなア」

ノワールは芝生の草を背中から落としながら、起き上がる。

「ほら、二人分ぐらいの賢者の石だ」

頬の治りかけの切り傷から赤い粘着性のある液体を滲み出て流れる。賢者の石である。

プライドは木陰から一本の黒い半透明状の小さな手の様な触手がズルズルと蛇が這うようにノワールの体を駆け上がる。

触手は頬の賢者の石を掬い上げると、本体である赤ん坊の口へと持つていく。プライドはそれを小さな舌でぺろりとなめる。

「ありがとうございます。助かりました」

素直に謝るプライドに不信感をいだき、身構える。

「とか言っで、オレを殺す算段とかしてねエよな」

「してません。なんでそう卑屈なんですか。私が知っていることは全て話します。人造人間の誇りにかけて」

「ノワールー！そろそろ帰るぞ！」

遙か遠くからロイの声がする。

「ありがとよ。プライド。おっと、今はセリムか」

ノワールはプライドの襟首を掴んで抱き上げる。

「私の最期の言葉と思って聞いてください」

ノワールの耳元のプライドの言葉が急に神妙になる。

「エルリック兄弟に会いなさい。あの兄弟は面白い。きっと貴方にも何か変化をもたらすでしょう」

「そうかい。騙され半分で行ってみるわ。そろそろ戻りな、セリム君」

何とも軽い言い回しであったが、しっかりと耳に留めたようで、薄く笑いが漏れている。

「ありがとね。長い間見てもらって」

うふふ、と薄く笑う夫人にセリムとなったプライドを手渡す。夫人は大事そうにセリムを抱きしめる。

「楽しかったよ!」

「じゃあ、行こうか、ノワール」

ノワールは子供らしくパタパタとロイとリザの間に駆けていく。

「はあ、疲れた。オレ、演技とか苦手なんだよな…」

ノワールは肩を落として小声で夫人について嘆いた。

「なかなか見物だった。楽しませてもらったぞ」

「殺されたいのか、貴様」

口喧嘩するロイとノワールの横で黙って沿い歩くりザ。

夫人から見た三人の風景は家族同然だったという。

第十二話 セリム・ブラッドレイ（後書き）

セリムとプライドの切り替わりは、原作最終巻の4コマから抜粋しました（＾Ｏ＾）／

アレをアニメで見るとどう見ても （書いていいのかわからないんで一応伏せ字）にしか見えません＞（――）＜

第十三話 白昼夢 その1（前書き）

すいませんが、日にちとかの関係で元旦番外編は書けませんでした
m (——) m

え？書かなくていいって？（？―？）

言っな！（つ　　）　ファルマン少尉風

第十三話 白昼夢 その1

オレはブラッドレイ邸を後にして、外を見る訳でも無く窓に頭を寄せる。

そして、セリム、いや、プライドのオレについての生い立ちを思い出しながら想像してみる。

正直、全く身に覚えのない話のようだった。

真理って奴はオレの中の記憶を根こそぎ持って行ったらしい。

退屈だけど今たった二人の為に喋って怒鳴って体力を消費しても無駄なだけ。

仕方無しにオレは外の自分の後ろへと流れていく風景を見るとしよう。

プライドが生まれた頃には既にオレはいたという。

オレは人間をベースに賢者の石を体に流させた人造人間、らしい。

だけど、何故か容姿は全く変わらないという。

「《黒ノワール》ですね？よろしくお願いします」

プライドが生まれ、父親だというジジイの手駒が増えた。

「…ああ」

その頃のオレは特徴ある髪の色をしていたらしい。

プライドの言い方からすると、恐らくオレは今のような髪色はして

ないようだ。

ム力つくがプライドにもオレが何処から来たのか、わからないらしいが東方の服装をしていて、帯に剣をさしていたという。

ってことは、オレが最初に着ていたものだろうか。

今と全く変わらないのは、おれの魚が死んだような目。

「ノワール、仕事に行ってくれないか？」

「じゃあねエ、あんたにはでっけエ借りがあんだ。やってやらア」

何の恩かは誰も知らないらしい。オレは懸命に仕事をこなしていた。

オレの役目は不穏分子の抹殺、国境沿いの戦争の影からの手助け。

国土錬成陣の血の紋を描く為だったという。

流血沙汰を起こす為、オレはアメストリス人という名がまだなかった頃の人々や戦争相手をまあ沢山殺して回ったとな。

「なあ、この国には、錬金術つてのがあんだろ？教えてくんねエか？」

オレの性分は知りたいの一点張り。オレは自分の仕事をしながら、ジジイに錬金術を習っていたそうだ。

好きこそ物の上手なれ。

オレは今でいう国家錬金術師を凌ぐ程、めきめきと上達した。

「人体錬成、やってみんか？」

ジジイの目的の為には『人柱』とやらが必要だった。

話を聞いたところ、人柱というのは人体錬成をして真理の扉を開いた者のことらしい。どうやらオレを利用して人柱を造りたかったのだろう。

「何それ？オレ知らねエぞ」

「死んだ人間を甦らせるという術だ」

その時、オレは少し沈んだ顔をしたという。

「死んだ人間は生き返らない。人体錬成は不可能。それは真理つてやつじゃねエの？」

力無く笑ったオレは人体錬成をするのをそう言って断ったらしい。

「んじゃ、行つてくらア」

オレが今のセントラル地下を出るのは大抵の人が寝静まった深夜。自分の身長に近い刀を持って行く。

人造人間って奴は、体の限界値が並の人間ほど低くないらしい。オレは走って戦場の最前線まで行っていた。

列車を使わなかったのは、オレは他の人と会ったのを嫌ったからだ。

今とさほど変わらないな。

戦場は錚々たるもので処理されない死体は腐敗して死臭を放ち、鴉がそれを食い荒らす。更には戦争孤児が兵士の懐を漁っていた。

水も食い物もないオレは彼等に果物や肉などを分け与え、ここを出て行くように促していた。

日が昇り、鉛玉が荒れ地を闊歩する時間帯になると、オレは隣国へ逃げていく人々を追い討ちに近い形で斬殺。

延々と自らの手を赤く染めた。

そんな事をしていくうち、オレの中から少しずつ殺すことに何とも思わなくなった。

更にジジイは色欲、強欲、嫉妬、怠惰、暴食と五人の人造人間が賢者の石を核に生まれた。

「ふーん、あなたがノワールね。元人間の」

色欲のラスト。

すげエ、スタイルのいいオバハン。

何かとオレのフォローをしてくれていたらしい。

「人間なんてろくなことないしね。人間卒業したんだ！おめでとう。ノワール」

嫉妬のエンヴィー。

オレに何かと食いついて来るえげつない化け物。人の事は言えないが……。

結構、馬が合った。

「ノワール！。お腹すいたー」

暴食のグラトニー。

お前はいつもすいている。

正直、オレはこいつの扱い方がわからない。

「うつせえぞ。グラトニー。ちょっとは痩せろ」

強欲のグリード。

こいつはオレと気が合う良い奴だ。

後でこいつが出て来る。

「喋るの、めんどくせえ。生きてるのも、めんどくせえ」

怠惰のスロウス。

確かこいつは昼寝していて体にキノコが生えてたな。

五人はジジイとプライドに従順で言われたことは何だってやった。

ただ、唯一グリードは不服そうではあったが。

ある日、オレは仕事の最中にグリードにその理由を訪ねてみた。

「何が不満なんだ？ 大方、想像はつくがな」

グリードは退屈そうに眉間に皺をよせた。

「想像通りだ。俺は強欲のグリード様だ。親父殿の言いなりになつてりゃ、俺の欲は満たされねえと思つてな」

「出て行きやいいんじゃないか？」

グリードは驚いてかなり間拔けな声をあげた。

「何でジジイの言う事なんざ聞かなきゃなんねえんだ？ てめエはてめエでやりやいんじゃないの？ てめエの反抗期はいつなんだよ？」

「ガーハッハ！！もつともだぜ！ 決めた！！俺は出ていく！」

「それがいいぜ」

オレは真剣にそう思った。血を分けた息子だとしてもそこまで言うことを聞かなきゃならないのかわからなかった。

「お前は何で親父殿の言うことを聞いてるんだ？お前も元人間なら自由に生きたいんじゃないかねえの？」

グリードの言うことも一理あった。オレも何の理由もなく何年もジジイの言いなりになって生きてきた。

「オレはただ知りたいものを知りたいだけだ。今はまだ、それがねエ」

「俺と一緒に来ねエか？」

多分、グリードが人造人間の中で一番人間だと思う。強欲が罪の源だとしてもグリードの強欲は正しい。

そう思った。

「俺は金も名誉も女も仲間もこの世の全てが欲しい。お前の知りた
いってのも欲だ。お前なら大歓迎だぜ」

「オレはまだあそこにいるわ。てめエはいい仲間と一緒に楽しくや
っていくのがお似合いだぜ」

「そうか、何か残念だな。んじゃ、俺は行くぜ」

「今からか？」

「正々堂々と裏切ります。って言うてみる、親父殿やプライドの野
郎に殺されるわ」

「はっ！そりゃそーだ」

そう言ったグリードは黄昏れ時の橙の空へ歩いて行った。
その背中はどこか清々しく、肩の荷が下りたようにも見えた。

「あっさり死ぬんじゃないぞー」

「おー」

セントラルの地下へ戻ると、オレはエンヴィーやプライドにこっぴどく怒られたらしい。

そして、グリードが去って数年後。オレも決心をした時がきた。知りたいものが出来たのだ。

それは錬丹術。最近、シン国で派生した医療に特化した錬金術だ。

「おい、ジジイ。オレ、ちょっと何年か出掛けるわ」

「グリードの次はお前かよ、ノワール」

エンヴィーはオレのすることにいちいち口出ししていたとな。ラストからすると興味がある証拠らしいが。

「どうせ、知りたい事が出来たんでしょ。ほって置いときなさいよ
エンヴィー」

「そうだぜ。江川コン君。事あることにちやちや入れるんじゃない
ねエよ」

「オイ、一瞬大人の事情に関わる、イケナイ事言っただぞ」

「本気か？」

ジジイはオレの前へ歩み寄り、顔を覗き込んだ。その時の不気味さは一生忘れないだろう。

「ああ、本気だ。ぜってえ帰ってくるからよ。安心しなうて」

何年かかるかわからなかった。だけど、何年かかっても、必ず帰ってくるつもりだった。

「何故行くのだ？」

「だって、ここにいてもオレは強くもなんねえし、なんせ世界を知りたい」

それは本心だった、近い未来にオレにも敵わない相手が現れるかも知れない。

その為にもシンに行つて鍊丹術を身につけて帰ってきたいのだ。

……シンに行くって言わねーけどな。

「実際のところ、あんたとオレは血は繋がってねー。ただ、命の恩人だ。必ず帰ってきてやる。オレは一言は言わねえって」

オレはそう言ってシンに旅立ったらしい。

当たり前だが、オレのシンでの出来事は皆知らないらしい。

「おいーす、久しぶりだな、ジジイ」

次に帰ってきた時は、プライド曰く、容姿は変わらなかったがかなりたくましくなっていたとか。

体術、剣術、錬金術ともにレベルが上がっていたらしい。

「スロウスは？」

「昔から怠けてばかりだったから、プライドにケツを叩かれて仕事してるよ」

国土錬成陣のファクターとなる、円状のトンネルを掘っているらしい。

「ん？誰だ？こいつ」

そして、七つの大罪で最後の人造人間も増えた。

「憤怒のリース。人間がベースの人造人間だ」

リースはキング・ブラッドレイとして、地上では大総統として頂上に立っていたんだと。

「おー、似た者同士？」

ラースは二丁の剣を携えた二刀流剣士。

「あんたの武器は剣と…何だ？」

オレが聞いたのはラストなら最強の矛、グリードなら最強の盾、オレには特別何もないことはないが、大抵の人造人間は何が人外の特技みたいなのを持っている。

「最強の目だよ」

眼帯を取ったラースの左目には、不老不死の象徴のウロボロスの入れ墨が入っていた。

「ふーん、『キング・ブラッドレイ』。この国の天辺か……。ブラ

ツドレイさんよ、あんたは闘う意味ねエんじゃね？」

「どついう意味かね？」

「あんたは、強いのか？」

ラースに喧嘩を売っていたのはオレからだっらしい。

剣士だったから、という意味もあるが、ただ単にラースと何も考えずに剣を交わしたかっただけかもしれないとされていた。

勝敗はついたりつかなかったり、勝ったり負けたりしていたらしい。

「なかなかやるじゃねエか。末っ子のくせに生意気な」

「ノワールとやり合うのは少し楽しい」

「『楽しい』か。そりゃねーぜ。こっちはてめエについていくのが

やっとだつてんのによ」

とは言いながらも、オレもなかなか楽しそうだったとラストが言っていたようだ。

だけど、ラーズは一度だけ、中央司令部で退屈なんだと聞いた事があつた。

「何がだよ？恵まれてんじゃねエか。若いうちにこの国の頂点に立つて軍事国家に仕立て上げたんだろぅが」

「全て父上がした事だ。敷かれたレールの上を走らされ、邪魔な者は父上が排除した」

「つまり、誰かレールをブツ壊してくれる奴がいねエかなーってか」

「平たく言えばな」

オレは建物の廂の上に立つ。

「人生つてのはわかんねエもんだ。この世界にいる奴は皆人間だぜ？他人の道を侵すのは神でも釈迦でもなく人間だ。いつかあんたのレールを爆破する奴も出て来るさ」

「おー、それはそれは。では、私はここでその遠い未来を楽しみにしておくとするか」

ラースは元人間だからか、オレの言うことを真に受け、人間の可能性とやらを期待しているようでもあった。

「好々爺はのんびり椅子に座って陽に当たっつけ」

オレはラースにそう言ったが自分にも言ったように思った。

ひとまず休憩しよう。

次はイシユヴァール殲滅戦だったかな？

これは悲惨だった。

後で思い出してみるとする。

第十三話 白昼夢 その1（後書き）

白昼夢は覚醒時に現れる非現実的な幻想という意味で、今回の内容と少し？だいぶ？違ってますf ^ | ^ ；

今回は白昼夢その1ということで次回はその2を投稿するはずですがf ^ | ^ ；

不定期投稿ですが、次回も楽しみにしていて欲しいです（< | >）
本音

第十四話 白昼夢 その2（前書き）

色々訂正しましたo(^-^o)(o^_^)o

表現の間違いと、前回の前書きのファルマン准……少尉とかf^
^;

男爵様、影夜叉様ありがとございますorz||3

もう一つ設定を変えてしまう重大な間違いをおかしていました(-
-;))

ノワールは五世紀近く生きています(。。(;))

一応わかる所は訂正しましたが、他にあるのかも知れませんm(
-)m

もしあれば感想と共に書いていただけたら有り難いです(T|T)

第十四話 白昼夢 その2

次はイシュヴァール殲滅戦。

オレが初めて国家錬金術師にお目にかかれた日か。
あと、前で複雑そうに座る鷹の目サント。

胸糞悪い事が山ほどあるが。

「はっはアー!!」

エンヴィーがいつにもなく、上機嫌で地下へ戻ってきた。
とてつもなく嫌な予感はしていた。

「何やってきたんだ？」

「アメストリスの軍の将校に化けて、イシュヴァールのガキを殺してきたんだあ！」

オレに衝撃と悪寒が走った。

えげつないエンヴィーのすることだ。残忍なやり方で殺したに違いなかった。

オレも沢山の人間を惨殺してきた。

だけど、元人間として人間をカス扱いするのは許せなかった。

「イシュヴァールのおちこちで暴動が起こってるよ！このエンヴィーが撃った一発の銃弾でみるみる殺し合いが始まってさ！」

オレは嬉々としたエンヴィーの演説を聞くに堪えなかった。
オレは黙ってその場が立ち去った。

「ラスト。ノワールいなくなっちゃった」

「元人間だからこの話を聞いてるのは辛いんですよ。しばらくそっ
としておきなさい」

「はあい」

オレも近いうちにイシュヴァールへ駆り出されると時が来るはずだ。

その時はただ言われるままに殺すだけだ。

エンヴィーが誰を殺そうと、誰が誰を殺そうと、関係ない。今まで
もそうしてきた。

オレには今更後ろを向いて悔やむ事は許されない。前を向いて死体
の転がる畦道を歩くしかないのだ。

戦場は悲惨なもので、相手も味方も殺したり殺されたり。渴ききつ
た荒野に血の紋が刻まれているのがすぐにわかった。生臭い血の匂

いが鼻につく。

オレの仕事はイシュヴァールの民の殲滅。
他国へ逃げる人々の斬殺。

そして、イシュヴァールの地に憎しみと怨みを植え付ける。

オレは大事にしている、いわゆるモットーってやつがあつた。

それは、国境沿いまで逃げてきた者へ、せめて痛みも苦しみも与えぬように必ず一太刀で仕留める事。できるだけ早く、楽に。
それはオレにも当てはまるからだ。

この体は頭を銃弾で撃ち抜かれても再生してしまう。
だけど、勿論、痛みはある。

例えば、顔が半分になっても、腕が一、二本ブツ飛ばされても、目が五等分になっても、体中に剣や銃弾を受けても、それぞれそれなりの痛みは感じるのだ。

それこそ、一瞬で死ねた方がマシだってぐらいに。

だから、一太刀で絶命させる。

そんな中時折、相手に言われる事がある。

「我らは死んでもこの事を忘れない！神が必ずやお前に鉄槌を下すだろう！」

オレはそういう時は、こう言ってやっている。

「神なんていない。ただの偶像さね。お前らは偶像に頼る術しかないのか？」

神が皆、何で人の形をしているか。
それは人間が造った偶像だからだ。
偶像は誰も助けやしないし、ましてやオレ達に鉄槌を下すなんて有り得ないんだよ。

次第に、オレは、近付けば殺られその姿を見た奴がいなかったことから、敵からも味方からも恐れられる『暗黒の閃光』と呼ばれていたらしい。

仕事がある程度片付き……とは言ってもラースが『大總統令三〇六六号』で国家鍊金術師を投入したから、もはやオレが自ら手を下す事も無くなっただけだ。

そんなわけで、一応、戦地の監視という形でイシユヴァールに留まることになったオレはさして興味があつたわけでもなかったが、頬杖をつきながら、戦場のど真ん中で国家鍊金術師サマの戦法を観戦していた。

どいつもこいつもオレですら出来そうな鍊成物でドンパチしているだけかと思っていたが、でかい火柱が立ったり、あちこちで爆発音が鳴り響いたりしてオレの好奇心をくすぐる鍊金術師が現れた。

一人は、『焰の鍊金術師』、ロイ・マスタング。

もう一人は、『紅蓮の鍊金術』、ゾルフ・J・キンブリー。

オレが知りたいと思ったものができた。思わずオレは笑みを漏らしたね。これほど、戦争というやつに感謝した事はない。

後者の方、ゾルフ・J・キンブリーにはすぐに会えた。なんせ、人造人間側に加担した奴だから。

賢者の石の効力を試す為に真っ黒の軍上層部に身を売ったのだ。

「よオ、あんたがこつち側になったキンブリーだつてな。見てたぜ」

オレが大抵、特定の人物に会う際は必ずそいつが一人の時か、敵地の真ん中かのどちらかだ。

「ということは、貴方が『暗黒の閃光』ですか。思ってたより、若いですね」

こいつがまた変人で、ただ自分の力が存分に使えれば、他はどうでもいいといった性格で、殺人に美意識を持つサイコパス。また、自分が異端といったことも自覚済みだった。そして、異様に人の顔と名前を覚えるのが早い。

「若い、ねえ。まあ、そうだろうな。あと、ついでに人造人間だぜ」

「なるほど、いい経験になりました。あなた方には感謝してます。これのおかげでいい音が聞けますから」

キンブリーは人間ポンプが得意になったらしく、べろっと出された舌の上で禍々しい賢者の石が覗かせていた。

「そうかい。どっちも無事で安心した。んじゃ、オレはこれで」

「あら、もう行くのですか？」

「オレはあんたに一目見たかったただけだ。じゃあな。せいぜい死なねエよう頑張れよ。期待してんだから」

「ええ、言われなくとも」

変人だが、なかなか楽しみがありそうだ。近い将来こっち側でいい働きしそうな奴だ。

次は『焔の錬金術師』。楽しみだ。

「え……よ」

おっと、誰かいるな。ダチか。見物見物。

「ああ、私達の美しい未来をな」

なるほど、こいつはキンブリーと違ってなかなかの好青年だな。だが、世界を甘く見すぎだ。夢と現実リアルのギャップに苦しんでる感じが。人は皆そうさ、恥じることはない。

オレの目にちらつと映したのは、高い建物の中からこちらを伺う物陰。遠くてわからない。

「っ!!」

瓦礫の中からイシュヴァール人の生き残りが這い出てきてロイ・マスタングを襲った。このころのこいつらはまだ殺気を察知しにくい奴だった。

オレは間近でそいつの鍊金術を見るまでは、ここで殺られたらそこまでの奴なんだと思っていた。

タ
ア
ン

ほぼ無音の銃声がそのイシュヴァール人の頭を貫いた。こいつを狙った建物に忍んでいる奴は、いい狙撃手だということはオレにもわかった。

「銃撃!？」

「大丈夫だロイ。俺達にや『鷹の目』がついている」

『鷹の目』。その時、オレはまだその存在を知らなかった。

「まだ士官学校生だけど、なんせ腕が良いんでな。ここまで連れて来られたらしい」

あんなところからピンポイントで狙えるなんて、それこそ鷹の目がね
エと出来る業じゃあない。

観察すべき対象がまた増えた。

「ロイ、お前知ってるか？『暗黒の閃光』の噂」

「いや、知らん」

「そいつと出会ってしまった奴は、敵味方関係なく斬り殺されるんだと。だから、誰もそいつを知らない。ただ、名前だけが独り歩きしてるんだ」

「そいつを見た奴がいないのにどうしてそんな噂話が広がってるんだ？馬鹿馬鹿しい」

「そいつが通った跡があるんだ。どいつもこいつも真っ二つ。その無惨さったらありやしねえ」

「……ヒューズ「ロイ、お前のことだからばったりそいつと鉢合わせして、殺されたりするかも知れねえ。気をつける」

「…ああ、わかったよ」

『鷹の目』リザ・ホークアイ。

その名の通り、琥珀色の目をした。綺麗な『女』だ。この頃の女士官学校生はかなり珍しかった。

話を聞いてると、ロイ・マスタングとリザ・ホークアイは知り合いらしい。

どっちも腕が良い。

オレはこいつらを失うのは惜しい気がして、できるだけこいつらのフォローに回る事にした。

しかし、キンブリーもマスタングもホークアイもオレが手助けする必要なんでなかった。

マスタングの錬金術を間近で見ると、まるで人型の火炎放射機。空気の中の水素と酸素濃度を調整した上、手にはめた錬成陣の中に火蜥蜴であるサラマンダーが描かれた手袋で空気中の塵に発火。そのまま、それを導火線代わりに目的まで導いてドカン。

この乾いた地であるイシュヴァールでは最適な錬金術だ。

その無限の可能性に興味が沸騰した水みたいにごぼごぼと沸く。血が騒ぐ。知りたくてうずうずする。

贅沢を言つと、手合わせ願いたい。剣ではなく、ちゃんとした錬金術で。

いつかそんな日が来るといいな。ライスの気持ち少しわかった気がする。

イシュヴァール人の最後の一人をマスタングが殺し、戦争は終わった。その場が歓声と安堵で満ちた。

ライス曰く、これからが楽しみだと言ったそう。

それはオレも変わらないけど。

殲滅戦が終わった後、オレは人柱を作り出すことに専念した。とは言っても人柱候補を見守るだけだったから、退屈で仕方ない。

次第にイシュヴァール人の生き残りが人柱候補である国家錬金術師を殺し回り、ラストやグラトニーが戦闘に駆り出された。

その間にも血の紋は次々と刻まれていき、ついにジジイの陰謀に気付きはじめた奴が現れた。

「ヤバいわね。鋼の坊や、それにヒューズ中佐が色々知ってしまっているようね」

オレは基本、言われたことだけをする、いわゆる操り人形。指揮は一番冷静で頭の切れるラストが取った。

「別に放って置いたらいんじゃない？」

「それがそうもいかないのよ。念のため第五研究所に行ってくるわ。エンヴィー」

「げ、オレも！？やだなあ、ケンカは嫌いなんだよね」

第五研究所に関してはこっち側からすると、ひとまず穏便に済ませたようだ。

それからすぐ、ヒューズが色々と感づき始め、オレ達でさえ警戒するほどに。

「人生を焦りすぎたな。先頭きって走って背中がから空きだって事も気付かずに」

結果、ヒューズをラストとエンヴィーは始末するということになった。

オレにはそれが少し惜しかった為、最期を看取ってやることにした。

「イカす入れ墨してるな。ねえちゃん…」

書庫かなんかの暗い部屋の本棚の上でその様子を眺める。イシユヴ
アールの時にマスタングの隣でいた奴か。

国土錬成陣に賢者の石の精製法、ウロボロスの入れ墨、その他諸々。
良い人材だった。人間側には勿体ない。ほんと、惜しい人間だ。

間一髪、ヒューズはラストの攻撃から逃げ、軍内の電話口へ訪れた
ものの、すぐにそこを後にした。

なるほど、良い意味でオレらに狙われる程の事はあるようだ。盗聴
の恐れから避けた。

だが、敵は一人とは限らない。外にはえげつないエンヴィーが待っ
てる。あいつの事だ誰かに化けてるに違いないな。

外のこじんまりとした電話ボックスで電話をかける。

オレはそのボックスの上で様子を伺う。

盗聴はされないが、電話交換手を介する為、やたら時間がかかる。
最悪なことにエンヴィーが銃を持ってやって来た。

「受話器を置いていただけますか、中佐」

エンヴィーは電話を切っても撃つだろうに。

「ロス少尉……じゃねえな。誰だあんた」

エンヴィーの演技に気付くとはなかなか。と思いきや、エンヴィーの変身が不完全だった。だけど、泣きボクローつで見抜くとは。

「くそつたれ……！」

助け出してやりたいね。
だけど、残念だな。
嫁に化けられては、手出しは出来ないな。絶望の中、自分の命が尽きるのを待つしかない。

「ほんとにえげつないな。仮にもお前は人造『人間』なのに」

せめての償いとして、地に落とした家族の写真をヒューズの手に渡してやる。

「すまねエな。あんたには怨みはねエんだ」

「ほんと、お前はこんな罫に引っ掛かるゴミみたいな人間に敬意を払うんだな」

「まあな、それでも元人間だから。けどお前、あんまり人間馬鹿にしてると痛い目見るぜ」

「このエンヴィーが？ははっ！ゴミカスがエンヴィー様に勝てるわけないじゃん！」

「お？やってみるか？」

「お、お前とはゴメンだ！」

逃げ去っていくエンヴィーを尻目に、操り人形の紐がぶつつりと切れた様に電話機にもたれ掛かったヒューズを見る。

「家族思いのパパだったんだな。もつと違う形でお会いしたかったぜ」

死んでいる様に見えない程、歯を食いしばっているヒューズの目尻からは後悔と悔恨の涙が流れていた。

オレはその場に何の痕跡も残さず立ち去った。無様に垂れ下がった受話器から聞こえる、悲痛な叫びがあまりにも虚しかった。

あれから、色々と人造人間側と人間側との間の駆け引きはなかなかスリルがあった。なんせ死なないはずの人造人間が死んだのだ。

マスタングは巧妙に計算と作戦を立て、ラストを殺したのだ。少々危なかったが目を見張るものだった。

リースの言葉を借りると、見事なり。」

「ブラッドレイ、あいつ、どうすんだよ？」

「あいつは扉を開ける男だ。飼い殺しにしておく」

「よかった。殺されんじゃねエかと心配した」

マスタングを殺されるのは困る。あいつの錬金術を知るまでに人造人間に狙われたらオレは人造人間組を裏切りつもりでいた。

「お前、あの男に興味があるのか？」

「の錬金術がな。手を下すならオレにやらせて欲しいぐらいだ」

「はっはっは。では、監視はお前に任せようかね」

「やったね。ヒマしてたところなんだ」

まあ、何かしらラースには我が儘を聞いてもらった。
でも、それはシンの戦士の気を感じ取れる能力によって実行されな
かったのだが。

エルリック兄弟に、マスタング組、シンの戦士の介入。
時代の変わり目にオレはいる。

ついにオレも動く時がきたのか……。

そのままオレはいつも通りジジイの下で働くと思われたのだが、突
然、人造人間組から姿を消したという。

「……ル、ノワール」

どうやら、オレは生い立ちを振り返っている途中であまりにもヒマすぎて眠っていたらしい。

震動する鉄の箱から下りると、闇の中に街灯に照らされた司令部が目に入った。

「話がある」

准将サンはオレの耳元で囁いた。大胆の予想はついている。

めんどくさそうなので、無意識に出た欠伸を噛み殺せなかった。

「別にオレは構わねエよ」

「そうか、ありがとう」

激怒されることはあっても、感謝される事はほとんど無い為、どうも慣れない。

大尉サンを自動車の前で待機させ、オレを司令部の中へ連れていく。案の定というか、当然というか、准将サンの話はその大尉サンに關してだった。

まあ、あの時の忠告は人間にとってキツイから。

「頼みたいことがあってね。彼女にお前の事を話したいのだよ」

「だろうな。ムリだ。とはさすがに言わねエ。今日の件でだいぶ真^オ実に近付いたからな。等価交換で」

錬金術師の性分は等価交換という言葉には従わなければならないらしく、反論の余地はない。法則だから。

「だが、これに関しちゃ、オレから話させてもらう。あの人がどんな奴かも知りたいしな。でも、オレにとって悪い人材と見なした場合は、無遠慮に殺すから」

「いいだろう。彼女とは古くからの付き合いだからね」

「……信頼。いや、信用か」

正直、人間の信用や信頼は、それこそ信用しない。
人間は裏切る。オレは過去に何度も見てきた。

……あれ？オレ、何でそんなこと知ってんだ？

ひとまず、准将サンは残業があつて今日は世話しきれないからと柄にも無い事を言つて、大尉サンには半強制で預かつてもらつ事になった。

さあ、どうしてやろう？

第十四話 白昼夢 その2（後書き）

これにてノワールの過去一部は書き終えました＼（^^：；）……
長かった（――）
あくまでもこれはプライドから聞いて、ノワールが想像した話です
のでその辺は考慮して下さいませm（――）m

後々これを捻曲げるかもしれないし、そのままやっていくかもしれない
ません（<―>）

この作品を読んで頂いてる方々。引き続き次の更新を楽しみにして
下さい>（――）<

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3544y/>

最後の人造人間

2012年1月5日23時47分発行